リリカルなのは―KIBA―

belgdol

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リリカルなのは無印に牙―ＫＩＢＡ―最終回後のゼッドさんを投入したらどうなるか？という妄想作品です。

基本原作沿い、ゼッドさんが居ることによる変更点あり、みたいな感じで。

以前投稿して一度一身上の都合で消去した作品の再投稿です。

以前評価していただいた方には申し訳ないことをしました。

遥か昔の作品の再投稿なのでサブタイトルが以前と違うかもしれません（サブタイトルのログはとっていませんでした）

目次

それは風との出会いなの ―― 1
ゼッドさんのお話なの ―― 9
話し合い（戦士風）なの ―― 17
皆の力をあわせるた結果なの ―― 27
フェイトちゃんとの出会いなの ―― 39
伝えたい気持ちなの ―― 50
思い続けたい気持ちなの ―― 60
それは悲しい想いなの ―― 72
全てを置いて、風は吹いたの ―― 83

それは風との出会いなの

朝、変な夢……少年が森で変な毛むくじゃらの獣と相対して追い払う夢……を見たり。

どこか浮世離れしたそれを見た上に、学校帰りに友人二人と帰っている間に聞こえた助けを求める声に導かれてフェレットを助けたりしたからか。

それらは少女を非現実へ誘うのに十分な要素だったのかもしれない。

あるいは、どこか日常の中で自分を生かすべき道を見出せなかった、そんな感情に魔が差したとでもいうのか。

彼女、高町なのはには危機が迫っていた。

夢と、学校帰りに聞いた声に導かれるまま、フェレットを預けた槇原動物病院へ向かったなのはは、まず音に襲われた。

それは甲高い、耳障りな音で、思わず彼女は耳を押さえた。

そして、昨日の夢で見たあの獣が、病院の中から飛び出してきたフェレットを狙い飛び掛り。

なのはは獣の爪から逃れたフェレットに思わず手を伸ばし、クリーム色の色の長袖の上着を着た胸の中に受け止めた。

「なに?なになに!?何が起こったの?」

「来て、くれたの」

「喋った!?」

本来どちらかといえばのんきというか、天然気味ななのはもこれには慌てた。

だって喋っているのはフェレットだ。

そんなの、作り話の中にだけある事だと思っていた。

だから、混乱して一瞬、獣の事を忘れてしまっていた。

唸るような叫びを上げた獣が、なのはとフェレットを狙って飛び掛る。

なのははオレンジ色のスカートとニーソックスを身に付けた足を動かす事が出来ず……彼女はどちらかといえば運動は得意ではない

……すでにその獣に二人が無残な姿にされるのは、避けられない事かのように思えた。
だが、その時風が吹いた。
それは天から薄い翠の光を放ち、紅く輝く剣を持って降り立ち、喰らいつかんとする獣を一閃で断ち切った。
「え？なに、なんなの？」
「これは、一体……」
しばし直前のフェレットが喋ったという驚きに続いての展開に追いつけず、意味の無い言葉を漏らすなのは。
それとは対照的にフェレットはその場の状況を把握しようと詰めているようだ。
切り裂かれて粘液を撒き散らした獣、フェレットに変身している彼はジュエルシードと呼ばれる遺失物の思念体だと認識しているソレは、既に再生を始めている
これはいい、なぜなら封印魔法で思念体の核であるジュエルシードの暴走を止めなければ止まらない物なのはわかっているから。
ではアレはなんだろう？
翠の輝く羽を仕舞い、左袖は半袖にねり、前後から腕にかかるようにベルトが垂れている赤いロングコートを翻し、黒い皮製のズボンを履いて、薄茶のシャツを着込みながら、思念体を油断無く見据える。
銀の髪を逆立てた褐色の肌の少年は。
無造作に剣を持っているようで居て、その姿に隙は無い。
思わず持っている武器からベルカの騎士の類かと思ったが、彼からは魔力は感じられない。
ただ、翼があったことを考えると人間ではない何かなのかもしれないが、フェレットはこの場がどうなるか、どうするべきか思考をめぐらす。
だが動きは少年の方からあった。
「おい。こいつが何で、どうすればいいのか解るか？」
再生を終えた思念体が、脅威を感じたのか少年に襲い掛かるも再び一刀の元に切り伏せられているのを目にして、フェレットは賭けに出

た。
「それは、ロスト・ロギアと呼ばれる危険な過去の遺物の一つから現れた思念体で、どうにかするには魔法の力で封印する必要があります！」
「魔法での封印、それは俺にできるか？」
「それは……無理です、貴方からは魔力を感じません」
「そうか。お前は魔力はあるのか？」
「すいません。僕の今の魔力じゃ、現状では封印できる可能性は……本来の人型になることすらおぼつかないんです」
　申し訳なさそうに手の中でうな垂れるフェレットの姿になのはが気を取られていると、眼光鋭い銀髪の少年が静かに言う。
「……この近くに封印を出来る魔力を持ってる奴は居るのか？」
　再び、思念体の一部を切り飛ばしながら聞く少年の声に、フェレットは小さな声で言う。
「……の……近では……この……しか……」
　搾り出すような声のフェレットに、少年は激を飛ばす。
「聞こえねえ！もっとはっきり言え！」
　その声に押されて、フェレットは声を張り上げる。
「この付近では、僕の念話を受け取れたこの女の子しか、居ません！」
「ふぇぇぇ!?わ、私なの!?」
「ごめん、こんな事に巻き込んで。でももう頼れるのは貴女しかいないんです。お願いだから、話を聞いてくれませんか」
「え、えと、あの……」
　戸惑うなのはに、戦っているというのに優しい声を掛けたのは少年だった。
「おい。どうしても嫌なら逃げて良いんだぞ。探せば他にも誰か居るはずだ」
「で、でもそれじゃ思念体が！策はあるんですか!?」
「ねえ。ただ、そいつがダメなら俺はここでこいつをぶった切り続けるだけだ。封印の出来る奴が現れるまでな」
「そんな無茶な！」

なのはは状況を把握した。
少年は戦う事は出来る、でもあの怪物を止める事は出来ない。
それができるのは、自分だけ。
そう自分だけなのだ。
大好きな友達も、大切な家族も居るこの街で、アレを止められるのは自分一人。
それなのに、突然現れた少年、といってもお兄さんと言っていい年頃のようだが、は逃げていいと言ってくれた。
本当は怖い。
言葉通りに逃げ出したい。
でも、それはしてはいけない事のような気がして、なのはフェレットに声を掛けていた。
「フェレットさん。私、どうすればいいの？」
「えっ。協力、してくれるんですか」
「うん。私この街の皆を護りたい。それに、あのお兄さんが一緒なら、大丈夫だと思うの」
再生を続け、巨大さを増す思念体と渡り合う少年の背中は、なのはに勇気を与えてくれた。
何のとりえもないと思っていた自分に、できる事がある。
それらの想いが彼女の背中を押した。
「解りました。御礼はあとで絶対するから、僕の言葉に従って」
「お礼なんていいよ。それより、どうすればいいのか教えてフェレットさん」
「うん、ではまず僕の体に掛かっている赤い宝石を持って」
「うん、解ったよ」
「細かくは今は省くけれど、それは魔法を使うための道具だよ。それを起動させるには呪文が必要なんだ」
「呪文……」
「うん。目を閉じて、心を澄ませて僕の後に続いて唱えてね」
「うん！」
「いくよ」

『我、使命を受けし者なり』
『契約の元、その力を解き放て』
『風は空に、星は天に』
『そして、不屈の心は』
『この胸に！』
『この手に魔法を、レイジングハート、セットアップ！』
「起動準備完了、セットアップします」
　争う思念体と少年の背後で、レイジングハートと呼ばれ、天に掲げられた宝石から長大な桃色の光が天に伸び雲を払う。
　少女が魔法を得るまでに、後少し。
「落ち着いてイメージして、貴女のの魔法を制御する魔法の杖の姿を、そして、君の身を護る強い服の姿を」
「きゅ、急にそんな事言われても……えっと」
　なのはがイメージしたのは、赤い宝石を半月状に囲む金の輪、そしてその根元がピンクで、もち手の部分となる柄は白いく、先端が再び桃に染まる機械的な杖の姿。
　そして、日々身に付けて馴染んでいるある衣服の形状。
「今はちょっとでも早く……これで！」
　なのはがイメージを定めると、レイジングハートに導かれるように体が動き、僅かな間裸身を晒しながらイメージしたとおりの杖を掴むと、その体は普段学校似通う時に来ている白いジャケットとロングのワンピースの制服を青で縁取ったような服が身に付けられ、最後にツインテールにしていた髪を改めて白いリボンが纏める。
　姿が定まったなのはは思わずポーズをとるが、次の瞬間には自分の体を見下ろして驚きの声を上げる。
「な、なんなのこれぇっ」
「その服はバリアジャケット、君を護ってくれる」
「そ、そうなの？」
「うん、それより今は封印を」
　促されてなのはが少年の方に視線を戻すとそこにはいまだ一歩たりとも思念体に譲らない少年の背中があった。

「僕等の魔法は発動体に組み込んだプログラムと呼ばれる法式なんだ」
「う、うん」
「そしてその法式を発動させるのに必要なのは精神エネルギーなんです」
「精神エネルギー……なんだか凄いね」
「それで、基本的な攻撃や防御の基本魔法なら呪文無しでも発動体、この場合レイジングハートの助けがあれば詠唱なんかは必要ないんですけど」
「お任せください」
「でも、あの思念体を封印して止める、元に戻すような強い魔法には詠唱が必要なんだ」
「そ、そんなこと言われても私呪文なんて……」
　解らないよ、と肩を落とすなのはにフェレットは続ける。
「心を澄ませて。そうすれば貴女の呪文が浮かぶはず」
「こ、心を済ませる……うん。解った」
　護られている。
　その安心感の中で、なのははスムーズに集中状態に入る。
　すると、その呪文はすぐに浮かんできた。
　これまでのやり取りの間、休まず剣を振るっていたにも関わらず少年に疲れの色は見えない。
　だから、なのはも力強く呪文を唱える。
「リリカル、マジカル」
「封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード！」
「ジュエルシード、封印っ」
「封印モードフォームチェンジ」
　なのはのもつレイジングハートの、金の輪の根元についた二つの突起からピンク色の羽が現れる。
　さらにレイジングハートの赤い球体からピンクのリボン状の光が少年と戦っている思念体の不意を付くようにその体に絡みつく。
　少年の剣で切り裂かれる時のように、苦しみのうめき声を上げる思

念体。
　その額にはＸＸＩの文字が浮かび上がる。
「準備完了です」
「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアルＸＸＩ、封印！」
「封印します」
　拘束された思念体の体を更にレイジングハートから放たれた桃色の光が貫いて思念体を消滅させる。
　後に残されたのは、青く輝く結晶体、ジュエルシードだ。
「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れて」
「うん」
　なのはがレイジングハートをジュエルシードに向かって突き出すと、まるで導かれるかのようにレイジングハートの赤い球体部分にそれは飲み込まれた。
「再封印、シリアルＸＸＩです」
　レイジングハートが告げ、自身の着衣が元に戻ると、なのははほっとした様子で一息ついた。
「終わったの、かな？」
「はい、貴女と……彼のおかげで。ありがとう、二人と……も……」
　なのはの問いかけに答えたフェレットは、気力で意識を持たせていたのか、気を失ってしまう。
「ちょ、ちょっと！大丈夫!?ねぇ！」
「……おい。そいつを持ってここから離れるぞ」
「ふぇ？」
「サイレンの音だ。なるべく辺りを壊さないように戦ったけど、やっぱダメだったみてえだな」
「ふぇえ？あ、あー！回り中穴だらけ！」
「あいつ、切りつけても液体みたいに分かれるだけで勢いはさほど殺せなかったからな……ちっ、面倒な事になる前にいくぞ」
「行くっていってもどこにいけばいいか……」
「解った。とりあえず飛ぶからひとまず落ち着けるところまで誘導してくれ」

「え?・ふぇえええ!?」
いきなりのお姫様抱っこだった。
中高生と思しき体格の少年が、九歳のなのはを抱えて飛ぶとなると自然にこうなるだろうが、なのはは慌てた。
「と、飛ぶって」
「飛ぶんだよ。いくぜ、アミルガウル」
「アミル、ガウル?」
少年の口から漏れた、何かの名前になのはが疑問を寄せるのを無視するように。
少年の背中から再び翠の翼が現れ羽ばたく。
すると少年はなのはを抱えたまま浮かび上がり始め、瞬く間に夜の闇へと消えていった。

ゼッドさんのお話なの

生身での空中遊泳に驚きを隠せなかったなのはだったが、少年を誘導して夜の公園へと降り立った。
そして今は、ベンチに腰掛けて少年とぽつりぽつりと会話を交わしていた。
「俺はゼッド、お前の名前は」
「えっと、高町なのはです」
並んで座り、お互いの顔を覗きあう二人。
なのははいまだ包帯の取れないフェレットを抱えていた。
ゼッドは幼い少女の顔をただ、幼いと受け取る。
なのはは釣り目勝ちで、目元に隈取のような赤いラインの入ったゼッドを、街中で見ただけだったら怖いお兄さんだと思っていたかも、と感じた。
「そうか。こんな時間になんであんなところに居た？」
「えっ、それは、助けてって声が聞こえたから……」
正直に言ってみれば、ああ、と声を発してゼッドは納得した様子だった。
「そういえば、その……なんだ、そいつがこの街で声が届いたのはお前だけだって言ってたよな」
「はい。あの、ゼッドさんはなんであの場所に」
ぶっきらぼうなゼッドの言葉遣いに、怖い人なのかなと思いながらその瞳をなのはは覗き込む。
だが、そこにあった少し変わった蒼い瞳の中には、小さな女の子を心配する、年上の少年の温もりのある光が見えた。
「……しいて言えば風に吹かれるままに行ったって所だな。どうせ面倒ごとだろうと思ったら案の定だ」
「あ、あの、ごめんなさい……」
「お前が悪いんじゃねえ。気にすんな。それに、厄介ごとが付いて回るのは俺の性分みたいなもんだ」
「性分ってなんですか？」

「ん？ああ、なんつーかな。そうなるのがなれっこっつーか。お約束みたいになっちまってるんだよ」
　苦笑するようなゼッドの言葉に、なのははフェレットの様子を見る合間に、ゼッドにも心配そうな視線を向ける。
「大変、なんですね」
「生きてりゃ、どんな形でも大変はあるもんだ。気にしてねえ」
「そう、ですね。なんとなく解ります」
　なのはは、ゼッドの言葉で大変だった頃を思い出す。
　あれはまだ小さい頃で、お父さんが入院して、お母さんはお店が忙しくて、お兄ちゃんもお姉ちゃんも自分に構っていられないくらい、武術の鍛錬に打ち込んでいた、あの頃。
　あの頃は寂しかった、辛かった。
　きっと、ゼッドのいう大変はそういうことなのかな、と思いながらなのはは言葉を続けた。
「あの、ゼッドさんはどこの人なんですか？」
「どこの人ってわけでもねえよ。しがない旅人だ」
「ゼッドさん学校は？」
「学校なんざとっくに卒業……はしてねえか。でも、さっきまでの俺を見てりゃ解るだろ。学校なんざ、通えねえよ」
「あ……その、ごめんなさい。ゼッドさんの事よく知らないのに勝手な事いっちゃって」
「いいから。そんな質問慣れっこだぜ。そんな縮こまるな」
「うう、そうはいっても」
　尚更縮こまるなのはに、ゼッドはそれ以上何も言わなかった。
　ただ、太ももの上に腕を置いて、頬杖を付いた姿勢で見つめるだけだ。
　その視線に晒されて、なんだか気恥ずかしくなったなのはに、ゼッドが声を掛けた。
「なぁ」
「は、はい」
「お前、よくやったよ。頑張ったな」

「あ、ありがとう、ございます、なの」
僅かに流れた沈黙の後、ゼッドは言った。
フェレットの事を見つめるなのはの心に届くように、言葉に力を込めて。
「お前は、力を手に入れてどうする」
「力、ですか？」
「ああ、力だ。そいつの言い方だと、攻撃する魔法とかあるんだろ」
「あっ……」
言われて初めて気づいた、と言うように。
初めて魔法を使って、街を守ったという事実で高揚していた気分の温度を下げる。
「俺は、力を得る為に色んなものを捨てちまった奴らを何度も見てきた」
「私も、そうだって言うんですか」
僅かに篭る恐れの色。
自分が力に溺れるなんて、自称平凡な女の子のなのはにとって、それはとても怖い事だった。
「そうとはいわねえ。だけどな、力を求めるあまりに大切な事を忘れちゃいけないって事は、覚えとけ」
「はい」
「そうじゃねえと、お前の家族が悲しむ」
僅かに、ゼッドの眼が遠くを見る。
まるで何かに思いを馳せるかのように。
「えっと、力を求めすぎるとどうなるんですか？」
「自分が本当に護りたかったものが、本当に欲しかったものがなんだったのか忘れて、破滅しちまう。少し、話聞くか？」
「あ、聞きたいです」
「俺はキースピリットっていう、力の象徴そのものと関わってきた。ソレも特に強いアミルガウルっていうスピリットとな」
「スピリット、ってなんですか？」
「シャードキャスター、俺みたいな戦士が精神力で従える、でかい精霊

みたいなもんだ」
　精霊、その言葉になのはは心をときめかせそうになったが、すぐに思い直した。
　ゼッドはそれを力の象徴と言った。
　それはきっと、なのはのような普通の子供が考える精霊のようなものではなく、もっと怖いなにかなのだろうと思ったから。
「アミルガウルに限らないんだけどな、スピリットは心弱いものが手に入れると、その人間を狂わせて、自分の言いように動かす毒をもつ」
「それは……そんなのと一緒に居てゼッドさんは大丈夫だったの？」
「そこらへんは色々あった。一時的に左腕、このシャード穴が付いてる部分が石みたいになったこともあった」
「……」
「俺の知る限り力ばかりを求めた奴は、皆死んじまったよ。師匠だったデュマスの野郎も、胸糞悪いヒューって奴も、アミルガウルの先にあるタスカーっていう力を求めた爺もな」
「ゼッドさんは、その、さっき「行こうぜアミルガウル」って。まだ、持ってるんですか？アミルガウルを」
　不安そうなのはに、ゼッドは目を瞑り息をついてからゆっくりと言葉を紡いだ。
「アミルガウルは俺と一体になるまで……真の所有者を見つけるまでの選別のために毒をだしてた。俺はアミルガウルで、アミルガウルは俺だ。だからもう、毒もない」
「そうなんだ……よかったぁ」
　なのはがゼッドの言葉に安堵すると、フェレットが身じろぎして目を覚ましたようだった。
　彼は周囲の様子を確認すると二人に言った。
「先ほどはありがとうございます。僕はユーノ・スクライア、ユーノが名前です。古代遺跡の発掘なんかをしています」
「あ、そうだね、お名前教えてなかったよね。私、高町なのは。小学三年生だよ。よろしくね」
「ゼッドだ」

ユーノを労わるように撫でるなのはと、ぶっきらぼうに名前を伝えるだけのゼッド。
そんな二人にユーノは感謝の言葉の続きを言った。
「すみません。お二人を巻き込んでしまって」
「俺は気にしねえ。お前も気にすんな」
「わ、私も！ちょっと、怖かったけど。皆を守れてよかったなって……」
「そういっていただけると、ありがたいです。でも、もう大丈夫です。後は僕一人でやりますから」
空元気を振り絞るようなユーノの言葉に、なのはが固まった。
「え？で、でも！怪我してるよ!?」
「すいません。先ほどの戦いで使わなかった分の魔力を怪我の治療に廻させていただきました。ほら、この通り」
ユーノが身じろぎして包帯をほどくと、確かにそこには傷の癒えた体があった。
それを見たなのはが感嘆の声をあげる。
「すごい。本当に治っちゃってる。ユーノくん凄い！」
「僕こういう魔法は得意なんです。だから……」
「おい」
全てを背負ってしまおうとするユーノに、ゼッドが声を掛ける。
ユーノは、何かを見透かされた気がしてびくりとし、うろたえた。
「な、なんですか？」
「お前、本来の人型になれないつったよなぁさっき」
「ん？そんな事言ってたんですかゼッドさん」
「言ってた。言い逃れはさせねえぞユーノ。お前、傷は治っても魔力はまったく本調子じゃねえだろ」
「あ……う……」
戦闘中に、つい咄嗟に言ってしまった言葉に追い詰められて、ユーノは口を閉ざす。
その様子にゼッドの言葉に間違いは無いと感じたなのはは声を張り上げる。

「ダメだよユーノ君！そんな状態で一人でどうにかしようなんて、無理だよ！」
「で、でもこれは僕がどうにかしないといけない事なんです。ジュエルシードは、僕が発掘してしまったものだから」
　それでも意地を張ろうとするユーノを、ゼッドが掴みあげて視線を合わせる。
「間違えんな。理想だけじゃ、どうにもならねえんだ。俺はお前を手伝う。だから俺を頼れ」
「ゼッドさん……いいんですか？」
「もう首を突っ込んじまった事件だ。最後までケリをつける」
「ありがとうございます。あの、でもなのはさんはやっぱり……」
「わた、私もお手伝いする！ユーノくん、なんていうか、ほっとけないもん！」
「そ、そんな理由で！」
「それに……ゼッドさんが、護ってくれるきがするの」
　なのはの言葉に目を細めるゼッドの眼差しは、優しさが篭っていた。
「いいぜ。なのはの事も出来るだけ守る。さっきの封印の様子を見ると、なのはの力はすげえんだろ、ユーノ」
「あ、はい。素晴らしい才能はあると思います。でも、無関係な人をこれ以上巻き込むなんて僕には……」
「無関係じゃないもん。もう私、関係してるよユーノくん」
「それは、巻き込んでしまったから！今ならまだ引き返します！ゼッドさんも止めてくださいよ！」
「俺は」
　ユーノの訴えに、ゼッドは言葉に力を込めて答えた。
「力を手に入れたとき、選ぶのはそいつ次第だと思ってる。使うのも、捨てるのも。なのはは使うことを選んだ。ならユーノ、お前はソレを助けてやれ。それが力を渡しちまった責任って奴だ」
「でも危険な事に巻き込むのは申し訳なくて……」
「だから、それも背負う事が力を与えちまった奴の責任なんだ。しっ

かりと背負え」
「ゼッドさん……解りました。僕も、僕なりに全力でなのはさんをサポートします」
　決心を固めたユーノの声に、なのはは笑顔になり言う。
「ユーノくん、だったら私達、もう友達だよね。友達は私の事、なのはって呼ぶよ」
「……わかった。ありがとうなのは。僕を助けて」
「はい！任されました！」
　ゼッドの手からユーノを受け取り、腕の中に収めて嬉しそうななのはに、ゼッドがぽつりと告げた。
　それは実は今もって進行中の、ある意味で大問題の話だった。
「ところでなのは。時間は大丈夫か？家族、心配してるんじゃねーか」
「ふぇ。あ、あぁぁぁーーー！そうだった！お兄ちゃん達に怒られるようー！どうしようユーノくん！」
「そ、それは僕にはちょっとどうしようもないかな」
　はふぅとがっくり肩を落としてしまったなのはと、困ったように頭を掻くユーノに、ゼッドは言った。
「家まで付いてってやるよ。これからお前がやろうとしてること、家族にも話さなきゃならねえだろ」
「え。あの、お話しなくちゃ、ダメですか？」
「当たり前だろうが。お前みたいなガキが危ない事に首突っ込むんだ。俺が守るっつった手前、筋は通しとかなきゃならねえ」
「あ、ゼッドさんが話してくれるの？」
「俺と、ユーノも話す。だけどな、親はきっと、お前の事心配して、絶対やめろって言うと思うからな。自分の気持ちを自分で素直に伝えて、それで許可を貰え」
「は、はい！」
「ユーノもそれでいいな？」
　なのはの腕の中にいるユーノも、こくりと頷いてからゼッドに続く。
「はい。こうなったら覚悟は決まりました。自分が悪人と思われても

いい。だから、なのはのご家族にはきちんと話をします」
「よし。じゃあいこうぜ。なのは、案内してくれ」
「わ、分かりました！じゃあこっちなの」
「よろしく頼むぜ」
夜の街を、二人と一匹が歩いていく。
それぞれに話すべき人に、何をどう話すかを考えながら。

話し合い（戦士風）なの

なのはの案内で辿りついた家は、立派な門構えに塀越しに二階建ての自宅が見える大きな家だった。
なのはは周囲の様子を伺うように、そっと門の戸を開く。
そしてゼッドを伴って迷うことなく家の中を目指す。
「なのは。こんな時間までどこに行ってたんだ?それに、その男の子は誰だ」
「お、お兄ちゃん!」
「あらなのは、こんな時間に男の子を連れてくるなんて十年早いわよ。もう、心配したんだからね」
「お姉ちゃんも!」
家の中で事情を話す覚悟をしていたから、余計にこの急な兄と姉の出現になのはは惑った。
どういえばいいだろう、どうすればいいだろう、それは九歳としては聡明な方に入る彼女にも経験の無い事態で、返答に詰まった。
だがそこでゼッドが間に入った。
「俺はゼッド。遅くなったんでなのはを送ってきたんだが、心配をかけたなら申し訳ねえ。すまなかった」
すっと素直に頭を下げるゼッドに、なのはの兄である恭也はいぶかしげな顔をしつつ、どういう事なのかゼッドに問う。
なのはの姉である美由希も、少々ゼッドを警戒している。
「こんな遅くにうちのなのはを連れ出して何をしていたんだ?事と次第によっては警察に補導してもらうことも考えなければならない」
「その事なんだけどな。きちんとなのはの親にも話したほうがいいと思うんだ。こんな夜遅くにわりいけど、家にいれてもらってもいいか?」
「ふむ……父さん達にも話さなければならない、事情か。いいだろう。なのは、先に上がっていろ」
「え、えっと……ゼッドさんは」
ゼッドを心配する名のはを見て、恭也は目で美由希を促す。

それに気づいた彼女はなのはを家に上げようと動く。
「恭ちゃんはちょっとまだ聞いておきたいことがあるみたいだら、先に入ってましょ。ほらほらなのは、ってその子なに!?可愛い！」
「あ、この子はユーノくんって言って」
「あ、昼間に話してたフェレット君なのね。うーん、可愛いわね。お母さんが見たら悶絶しちゃうかも」
「にゃはは……確かにそうかも」
そうしてさりげなく自宅の中になのは達が入って行ったのを確認してから、恭也はゼッドに問いただした。
「お前からは普通の人間ではない、戦いの中に居る人間の匂いがする。なのはとはどういう関わりだ」
警戒をあらわにする恭也に、ゼッドは目を瞑り、軽く頭を掻くと、それに答える。
「それもまとめて話す必要があると思ってんだけどな。まぁ、いうなりゃ戦友だよ。じゃあお邪魔するぜ」
「戦友?おい、どういうことだ!」
戦友と言う言葉に含まれる危険な意味を感じ取り、恭也はゼッドの両肩を掴む。
大切な家族を戦友などと言う、一見晴れがましくも、戦いがあったという危険を意味するものに含まれたのだから、恭也の反応は穏当な方だろう。
「だからそれをあんたの親父とお袋も含めて話すんだよ」
「ふむ。分かった。その分ごまかしは許さないぞ」
「分かってる。筋は通すさ」
思わず視線を険しくした恭也の瞳を、静かな瞳で見返して、自分にやましい事は何もないという態度を取るゼッドを、恭也はひとまず開放した。
そして、先に家に入り、早く入れ、なのはの置かれた状況が早く知りたいとせっつく恭也の姿は。
ゼッドにとってはとても好ましいものに写った。

「邪魔するぜ」
ゼッドがその言葉と共に入ったリビングは、普段はダイニングキッチン傍にあるテーブルが動かされてキッチン側になのはの両親、士郎と桃子が座り、通路側に美由希が座っていた。
なのはは、今は両親の正面でテーブルの上にユーノを乗せて、かなり緊張した様子で座っていた。
ゼッドも空いていたなのはの隣に座り、最後に入ってきた恭也が美由希の横に座ると、話し合いが始まった。
まず、なのはが何故こんな時間に家を出ていたのかを包み隠さずに話す。
先日みた夢や、下校途中に聞いた声、そして今晩外に飛び出すに至らしめた声について。
話を聞いた士郎達は困惑し、家族に相談しなかった事を叱ったが、なのはに対する責めはそれで終わった。
元から可愛い末娘だ、家族からの扱いは甘い、という事は無いが柔らかい。
そして、ユーノの説明が始まった時こそが高町家に嵐が通る時だった。
「始めまして。ユーノ・スクライアと言います。今回はなのはを危険な目に遭わせてしまって申し訳ありませんでした」
ユーノが口を開き、声を発した事にはそれを知らないなのはの家族全員が唖然と、いや桃子だけは余裕のある様子であらあらといった様子で見ていた。
とにかく、驚きを呼んだが彼が語ることはさらに先ほどは驚かなかった桃子をも驚かせた。
「今回なのはを夜分に呼び出すことになったのには理由があります。ロスト・ロギア。僕達の世界での遺跡から発掘される古代遺産なんですが、本来適切に扱えば、そんなに危険なものばかりではないんです」
一度言葉を切ってから、ユーノは後悔の滲む声で続けた。
「それが、今回僕が発見したジュエルシードというロスト・ロギアは、魔法の力で人の願いを叶えるという機能を持たされていたのですが、

その望みを叶える機能というのがかなり不安定で」
　ため息を区切りにユーノは更に話を進める。
「動物や人間の意図を捻じ曲げて叶えたり、使用者を求めて今夜なのはを呼び出す事になった原因の思念体、と呼ばれる暴れまわる危険な存在になったりするんです」
　最後に長い身体と尻尾をうな垂れさせながらユーノは言った。
「僕が、あんなものを発掘しなければなのはは危険な目に遭うこともありませんでした。本当にごめんなさい」
　うな垂れる様が土下座のように見えるユーノに、平静さを取り戻した士郎が言った。
「話は大体分かった。うちのなのはがとても危険な物に巻き込まれそうなった事や、君の後悔も。そこで聞こう、君はわざとジュエルシード?をばらまいたのかい」
　士郎の穏やかな問いかけに、ユーノは必死になって弁明した。
「ち、違います!僕は調査団の人に保管してもらって、次元航行船でジュエルシードを運んでもらうように頼んだんです!でも、事故なのか、船が墜ちて……ジュエルシードがこの近辺に落着して。どうにかしなきゃって……」
　ユーノの言葉に、士郎はわざとらしくしかめっ面を作る。
　ユーノはそれをチラリと見て、怒られるのも仕方ない、たたき出されるかもしれないな、と腹を決める。
　だが、士郎の言葉はそんなものではなかった。
「確かに大本の原因は君かもしれない。でもね、きちんとその扱いを専門の人に頼んで、その上で事故で散らばってしまったというなら、君は悪くないよ」
　慰めるように微笑む士郎に、ユーノはそれでも罪悪感を消しきれないようででも、でもと続けようとする。
　だが士郎はそれを遮って言う。
「もう一度言う。君だけが悪いんじゃない。だから責任を感じすぎず、もっと気楽にすると良い。話した感じ、まだ君は大人と言うわけじゃないだろう?それを、一方的に責めたりはしないさ」

「あり、がとうございます……う、うぅ……」
動物の姿で泣き崩れるユーノをなのはが腕の中に囲い込むのを見てから、ゼッドは口火を切った。
「こっから先は……本当はユーノが話のが筋なんだろうが、俺が代わる」
今まで黙っていた見慣れぬ銀髪の少年に、士郎はとりあえず何者かを聞く。
「君は、なんと言う名前で、どういう人かな」
士郎の当然の質問に、ゼッドは静かに答える。
彼の声は少年にしては落ち着いた色を持っていた。
「俺の名前はゼッド。信じてもらえるかどうかは分からないが、まぁ色んな世界をふらふらしてる。しいて言うならシャードキャスターだ」
「シャードキャスター？」
「シャードっていう……力だな、火を出す玉っころや電撃を出す玉っころ、そして人間を圧倒するスピリットシャードっていう珠を扱う、戦士だ」
「戦士？君の歳でか。見たところ十五、六歳といった感じだが」
「実践はそれなりにこなしてる。で、なのはが危険な目に遭うのは今回で終わりじゃねえ」
ゼッドの言葉に、士郎と恭也、美由希が身構える。
桃子はかすかに眉をひそめただけで何も言わない。
そんな中恭也がゼッドに鋭い語調で言葉を投げかける。
「どういうことだ。今回は事故のようなものなんだろう。なのははもう開放されてもいいはずだ」
気が昂ぶっているのか、腰を浮かせている恭也に、ゼッドはことさら静かに言った。
自分が落ち着くことで相手も落ち着かせようというかのように。
「ジュエルシードの思念体を封じるにはある程度の魔力って奴が必要らしいんだが、それを持ってるのはこのなのはくらいしかこの街には居ないらしいぜ。そして、なのはは俺達に協力するつもりだ」

ゼッドの言葉に一番最初に反応したのは父でも兄でも姉でもなく、母の桃子だった。
「本当なの、なのは」
「お母さん……」
「危ないことなのよ?この街という範囲で自分しか出来る人がいないと言われてやる気になったのかもしれないけれど、この街以外ならそれができる人は居るかもしれないのよ」
「でも、でも……」
「お母さんは反対よ。運動も、お世辞にもよくできない貴女が戦うなんて」
母の言葉に、覚悟を決めたはずなのに、大好きなお母さんが止めなさいというなら、その言葉に従った方がいいのではないか。
そんな風に思いそうになった時、ゼッドがなのはに言った。
「思い出せ。どんな気持ちで戦う事を決めたのかを。敵でもないお袋に負けてたら、敵なんかに勝てねえぞ」
「ゼッド、君は余計な事を言わないでくれ。なのはの心がぶれる」
恭也の言葉に、ゼッドは黙る。
もう援護は無い。
しかし、だからこそなのはは自分の言葉で、家族に自分の気持ちを伝えようと思った。
精一杯の自分の気持ちを。
「あのね、私自分にとりえなんて無い、できないことばっかりだと思ってたの。それで、将来したいことなんかも全然イメージわかなくて……でもね、今やりたい事ならあるよ!絶対にやりたい事!ゼッドさんとユーノくんと、力を合わせてジュエルシードを封印して、この街を、皆を守るの!やっと見つけた「私にできる事」、どうかわがままでも許してください!お願い!お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん!お願いします!」
なのはが頭を下げ、リビングに沈黙が降りる。
士郎も、桃子も、恭也も美由希も、黙り込んでなのはの言葉を反芻する。

それは、危険な子供の思い込みかもしれなかった。
肉親としては幼い末の子供を戦いの場になど送りたくない。
しかし、本人がようやく見つけた自分の特別なのだと頭を下げる。
叶えてやりたい、しかし危険は……誰もがそう葛藤していた。
そんな中、ゼッドが再び口を開く。
ただし、それはなのはに向かってではなく、高町家の面々に向かってだ。
「俺が守る。絶対とは言えねえ。だが、俺がなのはの盾になる。それで納得してやってくれねえか」
ゼッドの言葉に、恭也は静かに立ち上がった。
そして自分を見上げる美由希の視線を背中に受けながら言った。
「着いて来い。俺は多少武術を齧ってる。道場でお前の実力を見せてもらってから判断させてもらう」
ゼッドは黙ってそれに続く。
美由希はしばらく迷っていたが、恭也に続いた。
「あなた、なのはは私が見ています」
「分かった、頼んだよ。僕も恭也達を見てくる」
「あの子達が無茶しないように気をつけてあげてね、あなた」
「分かってるさ。君も、なのはの話、もっと良く聞いてあげて欲しい」
「分かったわ。それじゃあ、また後で」
「うん、また後で」
こうして、家族は二手に分かれた。
恭也はゼッドを障子の向こうにある板張りの道場に招き入れると、壁にかけてあった小太刀の木刀を二刀流で握り、その感触を確かめる。
「ゼッド、壁にかけてある木刀から好きなのを選べ。それで立ち会う」
「ああ、分かった」
それ以上は語らず、木刀の握りや重さを確かめるように比べたゼッドは、具合の良いものを見つけたのか。
壁際から道場の中央付近に居る恭也の前で向かい合う。
その時には既に士郎も美由希も道場の中に入っていて、立ち会う二

人を見守っていた。
「いつでも掛かって来い。先手は譲る」
見た目中高生のゼッドに対して、大学生である自らが力量を測る為に先手を譲る。
ゼッドはそれを受けて一気に踏み込み鋭い袈裟切りを放つ！
「オラァッ！」
「むっ!?」
ただの袈裟切りだ、ただ、速く、重い。
それは確実に敵を討つための剣だった。
小太刀一刀で受け流すつもりだったが、予想外に重いその剣に木刀を取り落としそうになった恭也は距離を取る。
ゼッドの守るという言葉、その剣はそれに値するだけのものを一刀の元に恭也に見せた。
だがまだ足りない。
愛しい妹を死地であるかもしれない場所に送り、そこで守ると言った少年だ。
まだこれだけでは不足。
「いい剣筋だ。次はこちらから行くぞ！」
小太刀二刀御神流は流れるような二刀の連撃で素早く敵を討つ変幻自在の剣だ。
逆袈裟小手狙い太ももを狙う切り払い、様々な剣筋を見せたが、ゼッドはその全てを重い剣圧とそれに見合わぬ剣速で押し返し、逆に恭也の間合いをこじ開ける。
その試合を見ている美由希は自らの師匠である恭也があんな少年に押されているのが信じられないといった様子で見ていた。
だが士郎は感じ取っていた、ゼッドの剣は強敵を既に何人も斬ったことのある剣だと。
そして行く度かの攻防を重ねて、ゼッドが大上段に構えて振り下ろした烈火のような一撃を恭也が小太刀二刀で受け止め、ビシリといびつな音がした時点で士郎は試合を止めた。
「そこまで！真剣であればまだ分からないが、武器がそんな状態では

もう試合は無理だろう。どうだ恭也。ゼッド君はなのはを守れるか？」
「恭ちゃん……」
士郎と美由希の声に、荒くなった息を整え、汗を拭ってから恭也は答えた。
「悔しいが……ここまでの使い手なら、よほどの事が、俺達家族でも守れないような相手でもない限り、なのはは大丈夫だと思う」
「そうか。そういう事だ。ゼッド君。僕達は君を信じよう。後は、なのはの方かな」
一方、ゼッドと恭也が濃密な戦いを繰り広げている間の事。
桃子は娘の、本当の気持ちを確かめていた。
「なのは。ユーノ君とお友達になって、助けてあげたいというのは解ったわ。それが貴女の選択なのね？」
「うん……」
「じゃあなのは、私達の皆が貴女を心配する気持ちにはどう応えるのか聞かせて」
「それは、えっと、ゼッドさんも守ってくれるし」
「ゼッド君より強くて怖い敵が出たら？」
「そ、それは」
「ねぇなのは、そんなものが現れた時、貴女は私達を残して、悲しみだけを残して、いってしまうの？」
言い聞かせるような声色の桃子に、なのはの眼から涙が零れそうになる。
だが、なっただけだった。
それはギリギリの所で踏みとどまり、涙ではなく言葉で母に答えた。
「そんな危ないのがでるなら、皆で力を合わせて、私が封印しなきゃいけないの。お母さん達に悲しい思いをさせるかもしれないっておもったら怖いけど、でも、そこで戦わなくて皆を失う方が怖いから。私戦うよ、お母さん」
まだ九歳。

そんな娘がどうしてこんなに頑固になってしまったのか。
内心ため息をつきながらも、桃子はユーノを抱えるなのはを座る椅子の背もたれごと抱きしめて言った。
「なのはの気持ち、良く解ったわ。私達の為に戦ってくれるっていう、その覚悟も」
「お、お母さん、許してくれるの？」
「んー、それはお父さん達のゼッド君の見定め次第だけれど……」
「お母さん……」
「お父さんがゼッド君に太鼓判を押したら、私はもう反対しない。応援するわなのは」
「本当!?」
喜びに茶色いツインテールがぴょこんと揺れる。
そんな娘の頭を撫でながら、桃子は付け加えた。
「でも、ジュエルシード探しばっかりじゃダメよ。学校の宿題はちゃんとやる事。いいわね」
「うん！私頑張る。ありがとうお母さん！」
こうして、母と娘の会話も終わり。
若干ユーノが気まずそうにしていたが、戻ってきたゼッド達に、改めて高町家の面々が改めて自己紹介を始める頃には、なんとか元気を取り戻していたのだった。

皆の力をあわせるた結果なの

なのはとゼッドに対する高町一家からの試練のようなものが終わった後の話だ。

ユーノはフェレットなのでなのはが喜々として自分の部屋で面倒を見ようとしたのだが。

ユーノの本当の姿は人であるという事を忘れていなかった恭也が待ったをかけた。

そして、その時にユーノ自身が自分は男で、魔力が回復すれば人の姿になるので女の子の部屋に一緒に寝起きするのは……と遠慮した。

するとなのははふぇぇぇ!?と慌てて男の子だったの!?などと動揺し、ユーノと同室で寝起きする事を諦めた。

そうなると次はゼッドだ。

住所を聞かれたゼッドが適当な場所で野宿をするのが普通と答えたことに桃子が反応した。

いくら武術をやっている夫や息子が認めたからと言って、子供が野宿なんて良くないと、ユーノ共々高町家の客室で寝起きする事になった。

こうして高町家に寝泊りする事が決まった夜、ユーノはゼッドと話しあっていた。

「ゼッドさんが居れば、昼間もジュエルシードの探索ができますね」

「俺は捜し物とかあんまり得意じゃねーからな。そこらへんは任せた。用はお前を運ぶ運び屋になればいいんだろ」

「そうですね。もしジュエルシードを発見したら、なのはが学校を終わる時間に連絡をいれて、それまで監視するという事で」

「連絡はどうやって入れるんだ?」

「あ、これはなのはには明日教えようと思ったんだけど。僕達魔法を使える人間は念話っていう、無線通話が可能なんです。それで連絡を取れば……」

「そうか。なら念話の使えない俺は基本的にどっちかについてないといけねーな」

明日以降のジュエルシード探索の算段をつけたところで、ユーノの興味の対象は少しずれたようだった。
ゼッドの布団の枕元に置かれている剣の柄が合わさって花の蕾のようになっている柄を見ながらゼッドに質問する。
「ですね。所でゼッドさん。あの時使っていたこの剣、腰に下げていましたけどストレージデバイスですか？」
「ストレージデバイスってなんだよ」
「ええと、インテリジェントデバイスと違って処理速度や記憶領域を確保する為に人格を入れていないデバイスの事です」
「そんなもんがあるのか。とりあえずそれはデバイスじゃあねえよ」
「え？じゃあもしかして……あの魔力刃みたいな赤い刀身はなんですか」
「この剣にはシャードをセットしてその力を刃にすんだよ」
「え!?じゃ、じゃあ非殺傷設定とかないんですか？」
「んなもんねえよ」
「あ、危ないじゃないですか！人間相手には絶対使わないでくださいよ!?」
用意されたベッド代わりの籠の中から身を乗り出して迫るユーノに、ゼッドは少し顔をしかめて答えた。
布団にもぐりこんだ所を見ると、いい加減寝ろと言うつもりなのかも知れない。
「わーたよ。俺だって無駄に人を殺したいわけでもねえ。もしもの時は拳でやってやる」
「お願いだよ！ほんとだよ！」
「解った。だから寝ろ」
「そうだね、さすがに僕も本当に、限界……」
先ほどまで威勢よく声を張り上げていたとは思えない口調で籠の中で丸まると、ユーノはすぐに寝息を立て始めた。
ゼッドも、不慣れな和式布団だったが、すぐに眠りに就いた。

そして翌朝。

携帯の目覚ましで目覚めたなのはは、いつものように制服に着替え、階下の洗面所で身支度を整えた後、リビングに向かうとそこにはいつもと違う、二つの影を見つけた。
一つはユーノで、昨日は食卓に乗せられていたが、さすがに食事時に机の上に居てもらうのは、という感じで床に置かれた皿から、桃子が作った手料理を前にお行儀良く待っていた。
もう一つの影は、静かに眼を閉じて腕と足を組んでいるゼッド。
「おはようお父さん、ゼッドさん、ユーノ君、あと、お母さんも」
「はいおはようなのは。牛乳、運んでくれる？」
「はーい！」
「それが済んだら恭也達を呼んできて。お願いね」
「うん！」
少しの彩をくわえて、異世界の話を高町家の面々が客人である二人に聞くという変化はあったものの、高町家の朝は過ぎていった。
そうしてなのはや恭也達は今までどおり学校に通い、ゼッドとユーノの時間がやって来た。
「ごちそうさん。俺とユーノはちょっくら街を見回ってくる」
「あら、もう行くの？」
「頑張れよゼッド君。でも、無茶はしないこと」
朝食を食べ終えたゼッドがユーノを連れ出す旨を告げると、士郎と桃子はそれを激励した。
ゼッドは、その言葉に、何か感じるものがあるらしく、しばらく動きを止めた後にユーノを肩に乗せて答えた。
「ああ。ジュエルシードは危険らしいしな。ところで」
「何かしら？」
ゼッドの、穏やかな瞳の中に静かなゼッドには珍しい明らかな色、羨望を受けながら桃子が返事をする。
「朝飯。美味かったぜ。俺は、結局一度もお袋の飯を食ってやれなかったから。ありがたかった」
そんな言葉を残してリビングを出て行くゼッドの背中に、士郎も桃子も、彼が母との間に何かあったのを察して静かになる。

「お母さんの手料理を食べてあげられなかったですって」
「どういう意味かは正確には解らないが……君の手料理が彼の心を少しでも慰めたならいいね」
「ふふ、そうね」
「まぁ、僕は毎日愛しい奥さんの手料理で一日頑張る活力を貰っているんだけどね！」
「あらあら、あなたったら。もうっ！」
残された桃子と士郎のおしどり夫婦ぶりは喫茶翠屋へ出勤するまで続くのだった。

「どうだユーノ。何か感じるか？」
首の周りに巻きつくように肩に乗るユーノがふるふると首を振るように何かを探る様子を見せた後。
ある一点でぴたりと顔の向きを固定すると、それをみたゼッドは頷いてそちらに向かい始める。
このような地道な見回りの結果、近所の神社に落ちていたジュエルシードを発動させずに監視し続けたり、深夜に学校へ潜入したりした結果。
三人は始めに封印したシリアルＸＸＩ、シリアルＸＩＩＩ、シリアルＸＩＩ、シリアルＸＶＩ、シリアルＸＸを順調に回収して行ったのだった。
そんな生活だが、ゼッドとユーノが昼に街を探索し、ジュエルシードの発見を行い、放課後になのはが封印という手順を取る事で、若干の余裕があった。
その余裕が、なのはにこんな事を言わせた。
「ねぇユーノ君」
「なんだいなのは」
夕飯前に学校の宿題をゼッド達の部屋で行うなのはが、ユーノに問いかける。
ゼッドは学校の宿題などわからねえ、と言って、本当に眠っているのか寝転がって眼を瞑っている。

そして当の問いかけられたユーノは、魔力を随分と節約できたおかげで既に人間としての姿……金髪の半袖半ズボンの美少年の姿をとっていた。
「あのね、思ったんだけど。私も魔法でゼッドさんみたいに飛べないかな」
「え。あ、それなら基本的な飛行魔法ならレイジングハートにインストールされてるから、練習すれば飛べるんじゃないかな」
「本当!?」
「うん。なのはは魔力の制御も上手いからきっとすぐにうまく飛べるようになるよ。練習したいならレイジングハートに言ってごらん。練習させてくれると思うよ」
「解った!ありがとねユーノ君!」
魔法の杖で空を飛ぶという、実に魔法らしい事が出来そうだと考えてウキウキとするなのはに、ゼッドからの横槍が入った。
「なあユーノ。そういえばレイジングハートには基本的な攻撃と防御の魔法も入ってるんだよな」
「え?うん。そうですけど」
「そうか。なぁなのは、空を飛ぶ魔法はお前が逃げたりするのに最優先で覚えるとして、防御と攻撃の魔法もしっかり練習しとけよ」
ゼッドの言葉に、なのははなんで?という顔で眼をぱちくりさせている。
「今まではなんとかジュエルシードは先手を打って封印できた。けどな、この先もそうとはかぎらねえだろ。俺とユーノが居なくても戦う、までいかなくても、時間稼ぎが出来るくらいには魔法をつかえるようになっとけってことだ」
「あ、そっか……そういう事も、あるかもしれないんだ」
「そうだ。レイジングハート、なのはのこと頼むぞ」
「問題ありません。私はマスターをいかなる困難からも守ります」
「ああ、ゼッドさんそれ僕が言わなきゃいけない事じゃないですか!」
「早いもん勝ちだ。お前はお前なりになのはにアドバイスできる事をしてけよ」

焦るユーノに自然体で言い放ったゼッドは、再び黙り込む。
なのはとユーノ、そして高町家の人々には早々に解ったが、ゼッドはあまり多弁な方ではない。
話しかければマメに答えるが、ゼッドから口を開く事は少ない。
彼が喋る時はそれが必要な時だ、というのが共通の認識になっていた。
「じゃ、じゃあさ、なのは、マルチタスクって知ってるかな？」
「ふぇ？何それ」
「ああ、レイジングハートもそういう話してないんだ。マルチタスクっていうのは思考を分割して魔法の制御を……」
ユーノは科学による魔法について、多少専門的な話を始めた。
こうなると完全にゼッドは蚊帳の外である。
だが、この部屋の中は仲間はずれにされたとか、したとか、そんな空気は一欠けらも無い。
短い付き合いだが、ジュエルシードの封印作業という危険な仕事が三人を急速に親しくさせていた。
なのはとユーノは常にジュエルシードとの対峙で先頭に立つゼッドに信頼を寄せているし、的確な処理でジュエルシードを封印していく二人にゼッドも、無言の信頼を寄せている。
ただ、その信頼ゆえに衝突が起こることもある。
それはなのはが魔法やマルチタスクの練習に夢中になり過ぎた時や、近頃ジュエルシードの発見が無い事だったり。
前者はそれとなくゼッドやユーノが無理をして体調を崩したら元も子もないと練習を中断させるのを、なのはが頬をふくらませて可愛らしい抗議をする程度なので問題は無い。
だが後者は少し深刻で、なのははまだ見付からないのかな、としきりに不安を訴える。
自分の住む街に危険物が散らばっているのだ、これもしょうがないと言える。
ただ、熱心に魔法の訓練に取り組むようになったなのはが広域に探索をかけるエリアサーチという呪文をレイジングハートから引き出

した時は残りの二人は苦労した。
やる気もあらわに、私も学校を休んで探索する！というなのはにしっかり学校に行くようにゼッドとユーノで言い聞かせたのだが、以外に頑固な少女はそれを聞き入れなかったのだ。
その問題は結局鶴の一声である、母桃子の勉強もちゃんとするって約束したわよね？という言葉で収まったのだが。
ゼッドには、少しなのはが魔法にはまり過ぎている気がしていたのだ。
そんな日々の中でも、なのはがきちんとつながりを保っている友人が居る。
月村すずかとアリサ・バニングスの二人だ。
彼女達は小さな喧嘩の後で和解し、それ以来の親友同士だ。
その繋がりでエリアサーチ修得後の始めての休暇は、三人で士郎がコーチ兼オーナーを務める翠屋ＪＦＣが試合をするのを応援する、という予定で探索は無しとなった。
なのはは残念がったが、ただでは済まさなかった。
ユーノの様子をすずかとアリサが見たがっていると言ってユーノを巻き込んだのだ。
死なば諸共である。
さて、ユーノが取られると念話が使えないゼッドはどうしようもない。
彼は高い家事能力があるわけでもなく、暇だと言うこともあり、家で留守番する事になったのだった。
高町家に居れば、とりあえずなのはの携帯から連絡がつく。

そんなわけで、試合当日。
「へー、あんたがなのはのところにホームステイしてる子？ユーノ・スクライアだっけ」
「はいそうです。なのはから聞いた話からすると、貴女がアリサ・バニングスさんですか」
「そうよ！それで、こっちの大人しい子が月村すずか！可愛いからっ

て変な事したら酷いわよ」
「ちょ、ちょっとアリサちゃん。初対面の子に変な事言わないで」
「あ、あはは。変な事をするつもりは全然ないから大丈夫ですけど」
「そうなの。ユーノ君はしっかりしてるし、優しいから大丈夫だよ」
「ふーん。なのは、随分こいつの事信用してるんだ」
「まぁもう何日も同じ家で暮らしてればね。本当にいい人だし」
「アリサちゃん。なのはちゃんに出来た初めての男の子の友達だからって警戒しすぎだよ」
「べ、別にそんなんじゃないわよ！ふんだ！」
紫の髪を白いヘアバンドで止めている、お嬢様ぜんとした胸元をリボンで飾った白い半袖の袖を折り返した上着とワンピースを着たすずか。
そして腰近くまである長い金髪を僅かに跳ねたような髪のくくりを作った、赤い肩掛けのついた長袖のワンピースを着たアリサ。
後はいつもの格好のなのはの前に、桃子から買い与えられたカジュアルな子供服を着たユーノが立って、試合開始前のウォーミングアップの合間にユーノを話の種に盛り上がる。
ユーノは話題の中心にいながら、ちらちらと背後の運動に興じる少年達を見やる。
と同時にマルチタスクの練習がてら、念話と普通の会話の同時進行を試みるなのはとユーノ。
「そういえば、ユーノくんはこういうのあんまりみないんだっけ」
〈あ、もしかしてユーノくんの世界ではこういうスポーツってあんまりない？〉
「うん。そうだね。僕はどちらかと言えば読書とか、屋内での趣味が多いから」
〈今言ったとおり。と言っても僕の場合屋内での趣味って遺跡発掘なんだけど〉
涼しい顔で同時会話を楽しむ二人。
アリサとすずかはそんな内緒話に気づかない。
「あらそうなの？ならすずかと話が合うんじゃない？この子、かなり

の読書好きよ」
「そうなんですか。どんな本を読まれるんですか」
「私は、どちらかと言えば工学系かな。姉の影響で機械に興味があるから」
「そうなんですか。僕は……」
〈ねぇなのは、この世界でも古代遺産とかに関する本ってあるのかな〉
〈ふぇ、それはあるけど私もあんまり詳しくないから……〉
念話は完璧、だからこそ逆にどうしようという感じでお互いが眼を合わせてしまう二人。
それは僅かな違和感をアリサとすずかに与えたが、すぐにそれも会話の波に飲まれていってしまった。
「僕は古代遺跡に興味があるんですけど、どちらかと言えばなんていうのかな、神秘的な方面に興味があって……図書館にはあんまりそういう本、ないですね」
「オカルトねー。たしかにそういうのになると図書館にはあんまりなさそうね」
「オカルト雑誌ならあるかもしれないけど、確かに古代遺跡っていうくくりがあるとアリサちゃんの言うとおり、あんまりないね……あ、なのはちゃん。試合始まるみたいよ」
「あ、ほんとだ！みんな頑張れー！」
「あんたら！あたしが応援するんだから勝ちなさいよね！」
「あはは、アリサちゃんむちゃくちゃすぎ。頑張ってね皆」
両チームの選手が配置につくと、気合の入った応援を始めるアリサ。
すずかはそんなアリサをちょっとたしなめてから、自分も静かに応援を始める。
同じお嬢様なのに、その様子は火と水くらい正反対だった。
「あ、ここに立ってたら僕邪魔だよね、ちょっと動くよ」
そういって、さりげなくユーノはベンチに座るなのはの後ろに回る。
ついでに、マルチタスクの練習の終了を念話で告げて、自分も応援

を始めた。
そんな彼女達の応援もあってか、四点差の完封勝利を決める翠屋ＪＦＣ。
その勝利を、子供達の敢闘を祝う為に士郎が翠屋でクラブの少年達に昼食を振舞っていた最中の事だった。
アリサ、すずか、ユーノと共に食事を楽しんでいたなのはが、クラブでキーパーを勤める少年が、鞄のポケットから見覚えのあるものを取り出して何かを確認しているのに気づく。
〈ユーノ君！ジュエルシードを持ってる子が居る！〉
〈え、ええ!?大変だよなのは！ジュエルシードは人の願望で力を解放すると、最大の力を発揮することになるんだ！なんとか回収しないと！〉
〈で、でも、どうしよう！〉
〈そうだ、携帯でゼッドさんに連絡を取って相談してみて！何か思いつくかもしれない！〉
〈わ、解った〉
「ごめん皆、私ちょっと……」
「なによなのは。ん？あ、そういうことね、いってらっしゃい」
「いってらっしゃいなのはちゃん」
「え？どういうこと？」
一人だけわけがわからないユーノが首を傾げるも、アリサに一蹴される。
「男のあんたはわかんなくていーの」
「え、ええ、なにそれ。すずかさんは教えてくれるよね？」
「え。うーん。これはちょっと……教えられないかな」
「うーん。なんなんだろう……」
「そんなことより、あんたの国の話、ちょっと聞かせてよ。なのはにはもう話してるんでしょ？」
「あ、うん。それなりには」
「私も聞きたいなぁ。教えてユーノ君」

なにやら女子二人に責められる男子一人という構図にユーノを叩き込みつつ、翠屋の中のトイレの中からなのはは自宅の固定電話をダイヤルする。
すると、間も無く家に居たゼッドに繋がり、事情を説明すると少しの沈黙の後、ゼッドが電話越しに質問を投げかけた。
「なのは、そのジュエルシードを持ってる奴はどんな奴だ」
「え、ええと。黒髪を普通の長さにしてて、白にグレーのラインの入ったジャージを着てて……えと、左胸にMのマークが入った……ダメ！これじゃお父さんのクラブの子の誰かゼッドさんに解らない！」
「落ち着け。他に何か無いか。もっと特徴のある奴と一緒に居るとかな。要は声さえ掛けられれば良いんだ。後はこっちで何とかする」
「えと、えと、そうだ！薄い青色のウィンドブレーカーを着た、茶髪のマネージャーの女の子が後についていった！その後すぐ別れてなければ男の子と女の子の二人組み！」
「解った。後は任せておけ」
ゼッドはあくまで落ち着いた様子で電話を切る。
一方通話の切れた携帯電話を握り締めて、なのははゼッドの考えが上手く行くように祈った。

ゼッドは、空に舞い上がる。
そして素早く翠屋周辺へと飛んで行き、空からなのはに聞いた特徴に当てはまる少年少女を見つけ出す。
すると彼はそよ風だけを感じさせる身軽さで目立たない場所に降り立つと、件の少年に声を掛けた。
「すまねぇ、ちょっと聞きたいことがあるんだ」
「ん？なにお兄さん」
「実は知り合いに捜し物を頼まれててよ。心当たりないか手当たり次第に聞いて回ってるとこなんだ」
「あ、それは大変だね。どんな物を探してるの？」
「指先くらいの大きさのひし形の青い宝石みたいな石で、シリアルナンバーが入ってる石なんだけどな。心当たりないか？」

ゼッドの言葉に、ぴくりと少年の顔に緊張が走る。
そして少年は言葉を捜しあぐねてちらちらと隣に立つ少女に視線を走らせる。
「え、えーと、その……」
「その様子だと、何か知ってるんだな？」
「……うん。実は昨日、これを拾ったんだ」
少しゼッドが揺さぶりをかけると、根は善良な少年なのか、大人しくズボンのポケットからジュエルシードを取り出した。
「おっ。それだよそれ、それジュエルシードっつーんだ。それっぽい名前だろ」
「そう、だね。はい、これ、ちゃんと届けてね」
「おう、わりいな。拾ってもらっておいてろくな礼もできねー」
「いや、いいんだよ。とほほ……悪いことはできないかぁ」
ゼッドの謝罪を受け入れながら、あわよくばジュエルシードを危険なものと知らずにねこばばする気だったのか。
少年はがっくりと肩を落とす。
「どうしたの？」
「い、いや、なんでもないよ！ほんと！それよりいこっか！」
「そうだね。そのお兄さんの用事も済んだみたいだし、いこっか」
肩を落とした少年を心配する少女に空元気を見せながら、少年は去って行く。
ゼッドは騙して物を巻き上げるなんて、ヒューの野郎みたいなことをしてんな、俺は、と思いつつ。
それでも無理やり取り上げたり、下手にジュエルシードの事件に巻き込むよりマシかと自分を納得させる。
こうしてゼッドに確保されたジュエルシードシリアルXは、友人達と別れたなのはによって、カーテンを閉め切ったなのはの部屋の中で封印される事になり。
ちょっとした休日に起きた、ちょっとした事件になったのだった。

フェイトちゃんとの出会いなの

その日の朝、なのはは浮かれていた。
対照的にユーノは少々大変だった。
実は久しぶりに月村家でのアリサも交えた休日のお茶会に二人とも呼ばれていたからだ。
「んー、ユーノ君やっぱり可愛いねー」
リビングで微笑みながら、そんな男の子に対する賛辞としてはあんまり喜ばれなさそうな事を言う美由希の前には。
すでにおめかしさせられた、薄手のカッターシャツと。
大人しい茶色の少年らしい細さの中に、かすかな力強さを感じさせる太ももの曲線を見せるホットパンツに近いズボンを穿かされたユーノが立っていた。
「あの、可愛いはちょっと……」
「あら、男の子に可愛いはちょっと嫌かな。でもユーノ君って顔の作りも女の子っぽいし……なのはとお揃いの格好でいってもいいのよ」
悪戯っぽく笑ってそんな事を言う美由希に、ユーノはぶるぶると首を振る。
そして必死な様子で腰の辺りを庇いながら美由希に言う。
「か、勘弁してくださいよ。さすがにスカートなんて穿けません！」
それはもう必死な姿に、美由希はおもわず笑って、冗談ですよー、と手を振る。
ユーノがほっと一息ついたところで、恭也も部屋に入ってきた。
そして恭也もユーノを見て頷くと、いまだ洗面所に居るなのはに声を掛けた。
「おーいなのは。ユーノはもう準備できてるぞ。時間もそろそろだし大丈夫か？」
からかいの混じった恭也のこの呼びかけに、なのはも元気一杯に返す。
「大丈夫！あと少しだから」
そう返された恭也はやれやれ、という顔をしているが、美由希はそ

んな恭也に。
少しむっとしたような顔で言った。
「今日は月村さんちにいくんだよね」
「え？いや、まぁ。なのはの付き添いだしな」
「そんな事言って、忍さんに会いに行くんでしょ、恭ちゃん」
「な、なんだ。別にやましい事はなにもないぞ」
「ふーん」
なんだか雲行きの怪しくなってきたことにユーノが冷や汗を掻いていると、なのはが現れた。
「おっまたせー」
「お、おお、来たな。バスの時間ぎりぎりだぞ」
「あ、じゃあいそがないと」
「そうだねユーノ君。お姉ちゃん、行って来ます」
「いってらっしゃい。あ、そういえばゼッド君は一緒には行かないの？」
「にゃはは……それが、「俺みたいなのがいってもしょうがねえ」って、今日は一人でお散歩するみたい」
「そっか。じゃあ留守番は私一人かー」
はぁっとため息をついてから、気を取り直したように美由希は三人に言った。
「ま、いいわ。三人とも楽しんできてね。恭ちゃんも遠慮しなくていいからさ」
「ん……いってくるよ、美由希」
「はい、行って来ます」
「じゃあ、改めて行って来ます！」
こうして三人はバスで月村家への道をゆくのだった。
そして、その頃のゼッドはというと。
「……この街はよく風が吹くな。海が近いからか？」
一人、ビルの屋上で剥き出しのコンクリートの上に座り込んでいた。
風をキーワードに記憶の底から、風の吹かない世界で故郷である

カーム。
風を持って自らを異世界へ誘ったアミルガウル。
そして、色々ありはしたが、最終的に友人達との安らぎの場になっていた風の国テンプラーに思いを馳せる。
あの、アミルガウルに誘われたことから始まった戦いの旅路は今でも鮮明に覚えている。
力を至上とする国を乗っ取り、そこからさらに全領域を支配しようとしたヒューとの戦い。
絶対規律で民を縛り、いつしかそれに縛られ最後には自滅するかのように国体を崩したネオトピア。
じりじりと削られるような貧しい土地を、タスカーという神のごときスピリットに頼る事でどうにかしようとしたタスクの四天王達。
そして、タスカーのよりしろになりかけて、最終的には越えようとした自分に助けを求めてきた親友、ノア。
さらに死んだ後にも精神となってタスカーの毒で狂い荒ぶっていたゼッドを怒りによって正気にもどしたジーコ。
最後にスピリットの神であるタスカーを、その中心として封印の鍵となっていたアミルガウルと共に倒した事。
そんな長く、深い思い出に浸っていたゼッドに、風が語りかけた。
そんな気がした。
「何か、あるみてえだな。いくぜ。アミルガウル」
そしてゼッドは飛び立った。

一方その頃、なのはとユーノは月村家の敷地内の森を走っていた。
「なんだか違和感を感じたけど、これがジュエルシード発動の感覚なだねユーノくん」
「そう。ちょっと強引に抜けてきちゃったけど大丈夫かな」
「うーん。最近私が元気な理由を聞かれてたから、ちょっと変な誤解はさせちゃうかも」
「うっ。ご、ごめん」
「にゃはは、いいのいいの。ユーノくんとはお友達だもん」

そんな事を言いながら走る二人の目の前に、巨大になった猫の姿が見える。
バスほどのサイズになった猫はのんびりとごろごろしている。
「ユーノくん。あれ……」
「う、うーん。もしかして猫の大きくなりたいって願いが、正しくかなえられた、のかな？」
「あはは、そっか。どうしよう、ゼッドさんに連絡は取れないし」
「うーん。あの猫は大人しいみたいだし、僕達だけで封印しちゃおう」
「ん、わかった。じゃあお願い、レイジングハート！」
さっそくセットアップして魔法少女の姿へ変わろうとするなのはを、ユーノが止める。
「あ、待って。今結界を張るから」
「訓練の時に使ってる奴だね。お願いユーノくん」
「任せてなのは」
地面に魔方陣を展開させ、結界を形成するユーノ。
そしてセットアップを行い、準備万端となったなのはが猫が発動させたジュエルシードを封印しようとしたその時だった。
巨大猫の横腹に金の光が直撃し、輝く魔力光を放つ。
鳴き声を上げる巨大猫。
それに釣られて光の飛んできた方向をなのは達が見ると、電柱の上に赤い裏地の黒のマントと、腰に白い布を纏ったレザージャケットのようなバリアジャケットを着た金髪の少女が、杖を構えていた。
「あの子、なんなの!?」
「あ、アレは魔導師!?何でこんな所に！」
「まだ構えてる……やめてぇ！」
「ファイラーフィン」
ユーノの封時結界……要約すると作った人間以外の時は現実と離れ隔離される閉鎖空間……で一番に練習した飛行魔法で猫の傍に飛んで行くなのは。
続く金色の魔力光を放つ攻撃を、円形の盾の防御魔法で受け止める。

「プロテクション」
「ありがとうレイジングハート。あの！あなた誰ですか!?この子おとなしそうだから、そんな魔法使わなくても封印、できると思うんですけど！」
〈なのは！気をつけて。もう少し時間は掛かると思うけど、次元をわたる警察のような次元管理局が来るまで、このあたりに魔導師なんていないはずなんだ！〉
〈え、それってどういう事？〉
〈……ジュエルシードを運ぶ船が落ちたのは誰かの仕業で、その子がその仲間かもしれないって事〉
　二人が念話をする間にも、少女は攻撃の手を緩めない。
「バルディッシュ、フォトンランサーセット」
「畏まりました」
「シュート」
「うわっ！」
　なのはのプロテクションに当たり爆発を起こす攻撃魔法。
　少女は戦いなれているのか、即座にその爆発の煙幕に紛れてなのはに接近し、近接用の鎌のようなフォームに変えたデバイスで斬りかかる。
「わ、わわっ」
　一方、なのはは魔法を使う練習はしてきたが、戦闘のシミュレーションはあまりやってこなかった。
　そのため、少女の斬撃を防御範囲の広いプロテクションで耐えるしか出来ない。
　飛んで退く訳には行かない、後ろには猫が居るのだ。
「……この子……埒が明かない」
　一旦距離を離し、デバイスを砲撃形態に変えて魔力を十分充填してから構える。
「フォトンランサー、連続発射」
「よろしいのですかマスター」
「いいのバルディッシュ。あの子には怖い思いをさせるかもしれない

けど……母さんの為なんだ」
「了解いたしました」
少女が離れ、プロテクションを解除して様子を伺っていたなのはには見えた。
杖は攻撃しようとこちらに向けているのに、どこかそれ自体が哀しそうな少女の顔を。
「あの子、なんであんな泣きそうな顔で戦ってるの……？」
「シュート！」
少女の様子にあっけに取られたなのはが同様していると、少女の頭上に次々放たれる光の矢の群れがなのはに向かって襲い掛かる。
それを見て慌ててなのはは一層強いプロテクションを張ろうとするが。
〈なのは！それは僕に任せて！〉
〈ユーノくん!?〉
〈なのは、防御は僕に任せて、君は誘導弾であの子に攻撃するんだ〉
〈で、でもユーノくん……あの子、なにか哀しい眼をしてる〉
〈……話をするなら、まずは状況をどうにかしなきゃ。だから、頑張ってなのは〉
「妙たえなる響き、光となれ、癒しの円のその内に、鋼の守りを与えたまえ！」
ユーノの叫びと共になのはの周囲に強力な防御魔法が張られ、それは黄金の矢の群れを見事に受けきった。
そうなればなのはも、戸惑ってばかりは居られない。
「レイジングハート、アクセルシューター！」
「了解しました」
「お願い、こんな事やめてよ！お話しよう！」
なのはは切なさを込めて声を上げるが、金髪の少女は、それを少し眉をひそめて返す。
「それは、きっと意味が無い」
言葉と共に近接形態のバルディッシュから伸びた魔力刃で誘導弾を切り裂いた少女は、再びなのはに接近を試みる。

ユーノが拘束魔法でそれを阻もうとするが、少女はすべらかな飛行でそれをかわしてなのはの懐に入り込む。
「私はジュエルシードを集めなきゃいけないんだ。邪魔しないで」
「私は、ジュエルシードの取り合いをしてるつもりはないよ！猫さんが可哀想だから攻撃はやめてっていってるだけなの！」
一瞬、沈黙が降りる。
少女が状況を理解するのに思考を停止したその瞬間、ユーノの拘束魔法が少女を止める。
「し、しまった！」
失態、それを自覚した少女がもがく。
「は、放して！私はジュエルシードを……」
「ごめんね、ちょっと待ってて」
もがく少女を尻目にして、なのはは魔法戦の音に驚いた様子で毛を逆立てている猫に向かって、封印魔法をかける。
すると、桃色の光に包まれた猫が縮み、普通のサイズになると共に。
シリアルＸＩＶのジュエルシードが浮かび上がる。
「なのは！気をつけて！バインドが破られる！」
「え？」
そう、まさにその時死に物狂いで拘束を解いた金髪の少女がなのはに向かって鎌を振るい……風が二人の間に降り立った。
「ゼッドさん！」
「大丈夫かなのは。とっとと仕舞っちまえ」
バルディッシュの魔力刃を避けて、デバイスの柄を掴んだゼッドがそこに居た。
新たに現れた人間も敵だと判断すると、少女は撤退を決意し、どうにかゼッドを振り払おうとしたのだが。
「待って！あのね、貴女がジュエルシードを捜してる理由を教えて！」
「だから、意味が無い」
「無い分けないよ！ジュエルシードは危険なものだけど、貴女の眼、なにか理由があってこれを捜してるっていう眼だもん！」
「それが、貴女に何の関係があるの」

「ユーノくん、この子が事情を話してくれたら、このジュエルシードあげても譲ってもいいかな？」
　地上のすぐ近くに居るユーノは、その提案に眼を丸くする。
「だ、ダメだよなのは！ジュエルシードは危険って、自分でもいってるじゃないか！」
「うん。これは私のわがまま。でも、この子も封印はするわけだし、ただ奪い合うだけは、ちょっと哀しいから。ね、教えて金髪さん。貴女の目的と、名前。私はなのは、高町なのはだよ」
　なのはの無茶な言葉に、ゼッドは何も口を挟まない。
　ただ少女を釘付けにしているだけだ。
　むしろ彼は、なのはを援護した。
「好きにさせてやれよユーノ。もしこいつがジュエルシードで何か企む人間なら、なのはにけじめをつけさせる。それでいいだろ」
「そうは言っても……ゼッドさんも止めてください」
「悪い事ばっかりでもねえだろ。相手の目的がわかるならその後どう対応するかも考えられる。それに」
「それに？」
「それがなのはの考える、通したい筋って奴なんだろ。見守ってやれ」
　静かな、刃を向けられていると言うのに澄んだ瞳のゼッドの言葉に、少女の瞳が揺れる。
　そしてその心の中に、どんな感情が渦巻いているのか。
　視線を刃を向ける相手から外し、俯いた少女は。
「バルディッシュ。サイススラッシュ解除」
「……了解です」
　少女のデバイスから伸びていた魔力刃が納まる。
　それを確認するとゼッドは黙って手を引いた。
「私は、フェイト・テスタロッサ。母さんの願いでジュエルシードを集めている」
「フェイト、ちゃん？ジュエルシードを集めるのはお母さんのためなの？」
「そう。ジュエルシードを集めたら、母さんが、笑ってくれると思うか

ら……」
　そういって寂しげに笑うフェイトの顔に、なのはの胸が締め付けられる。
　なんて哀しそうな顔だろう。
　こんな顔をさせるくらいなら、ジュエルシードをすべて渡してあげてもいいんじゃないかという気持ちが、一瞬だけ過ぎる。
　だがそれは出会った当初に見たユーノの、責任を取りたいという必死な姿や、街を守ると言う目的に打ち消される。
　けれども、それだけでは終われないのが高町なのはという少女だった。
「じゃあさ、フェイトちゃん」
「何……？ええと」
「なのは、なのはって呼んで。あのね、次からは、ジュエルシードを見つけたら協力して封印して、勝負をしよう」
「しょう、ぶ？」
「うん。お互い、譲れないものだから。精一杯戦って、勝った方が持っていって恨みっこなし、これで……」
　なのはがそこまで語った所で森の中からオレンジ色の髪の、犬耳を付けた女性が飛び出してきた。
「フェイト！そんな奴らのいう事信じちゃあいけないよ！どうせ、いざ負けたら数で奪い取ろうとするに決まってる！だ……ちょ、ちょっとなんだいあんた！邪魔すんじゃないよ！」
「アルフ!?」
「うっせえ黙ってろ。今はあいつらのサシの話だ」
　アルフと呼ばれた女性の、握り固めた拳を止めて、ゼッドはなのは達に会話を促す。
「ほら、続けろよ。なのはの提案を受けるかどうか」
　攻撃を止めはするが、明確な敵対行動を取らないゼッドの言葉に、フェイトはアルフとなのはを交互に見比べ。
　しばらく黙った後に言った。
「まだ、信じ切れないから。この先それを証明していってほしい。も

し信じられるなら。私もその方が良い」
か細い、しかし確かに聞こえた嬉しいと言う言葉に、なのはは笑顔になる。
「ありがとうフェイトちゃん！私信じてもらえるように頑張る！じゃあ、まずは今回のジュエルシード、渡すね。
すっとレイジングハートを差し出すなのは。
少しとまどってから、バルディッシュを同じように差し出すフェイト。
杖の先端が重なったとき、確かにシリアルＸＩＶのジュエルシードはレイジングハートからバルディッシュの中へと移動していった。
「あ、本当に……くれた」
「約束は守るよ。じゃあ、フェイトちゃん。次からの戦いは、私負けないから」
「……私も負けない。母さんの為に」
「じゃ、またね」
「……うん。アルフ、帰ろう」
マントを翻し、その場を立ち去ろうとするフェイトを追おうとするアルフをゼッドは開放してその背中を見送る。
ゼッドは残ったなのは達に言った。
「やるからには全力でいけよ。手加減されるってのは、案外相手を傷つけるからな」
「しないよ！……そもそも、手加減なんて出来る相手じゃなさそうだし。でも、私頑張る」
「な、なのは。頼むよ！お願いだから勝ってね!?」
「もー、ユーノくんは心配性だなぁ。全力は、尽くすよ」
「ま、そういう事だな。俺はまともな入り方してないから飛んで帰るから、ここいらで一旦おさらばだ。お前らもお茶会とやらは終わったのか？」
ゼッドの問いにあっという顔になるなのはとユーノ。
「ど、どどどどうしようユーノくん！絶対問い詰められるよ！」
「え、えと。ね、猫！そこに寝てる猫を連れ帰ってさ、遊んでたらつい

ついみたいな感じで行こう！」
「解った。うう、絶対つっこまれるよ……」
「あ、あはは……」
そんな、ちょっと困った様子の二人を残してゼッドは再び羽ばたいて空に飛んでいった。
当然、なのはとユーノはそのごアリサに散々二人で何をしていたのかつっこまれて、ぐったりして帰って恭也を呆れさせたのだった。

伝えたい気持ちなの

なのははあの森での一件から、一層魔法の練習に力を入れるようになった。

具体的に言えば、ユーノに結界を張ってもらって、ゼッドと模擬戦をするようになった。

ゼッドは魔力こそ無いが、キャスティングシャードで作った盾を持った的役くらいは出来る。

そして、あの後高町家とユーノがアリサとすずかの姉の忍、そのメイド達でいった温泉旅行さきで。

再びフェイト出会い、善戦したものの敗北したなのはは、帰宅後ゼッドに悩みを打ち明けていた。

「ねぇ、ゼッドさん」

「なんだ」

「フェイトちゃん、お母さんの笑顔の為にジュエルシードを集めるって言ってた」

なのはの言葉を、ゼッドは無言で聞く。

「私、お母さんに笑ってもらいたい、こっちを見て欲しいって言う気持ち解るんだ」

アルフさんには、守られてぬくぬくしてる私なんかに解るわけないって言われちゃったんだけどね。

と、泣きそうな色が混じる声を、それでもゼッドは黙って聞き役に徹する。

「ちっちゃい頃ね、お父さんが入院して、お母さん忙しくて、お兄ちゃんもお姉ちゃんもお母さんの手伝いやお父さんの看病で私のこと見てくれなくて、私一人で……その時に、お母さん達に笑って欲しい、見て欲しいって思ったことがあるから、なんとなく、解るの」

「……お袋には、自分のこと見てもらいてえよな。俺も解る」

「だから、私ユーノくんの手前フェイトちゃんと勝負してジュエルシードを取り合おうなんてことにしちゃったけど、迷ってるんだ」

「そこは迷うな」

「え？」
　ゼッドの静かな言葉に、俯きかけていたなのはは顔を上げる。
「お前は、一度ユーノの味方をするって決めたんだろ。だったらユーノにとっても大事なジュエルシードを確保するのに全力を尽くせ。それが筋だ」
「そう、だよね。私、ユーノくんの事忘れそうになってた。あの子に同情するだけじゃ、ダメだよね。あの子の気持ちも考えて、その上で私は私のするべきことする。じゃないと、きっとダメなんだ」
「そうだ。半端な奴は信用されねえ。お前がもっとあのフェイトとかいう奴とお互いを知り合いたいなら、全力で行け」
　珍しく多弁なゼッドに、もしかしてゼッドさんもお母さんに思うところがあるのかな、と思いながらなのはは頷く。
　その後に、ゼッドははっきりと言った。
「俺は、親友だと思ってた相手と試合をすることになった時、本気になれなかった、それは俺と並びたいと願ってたあいつを傷つけた。だから、お前は手を抜くな」
「……解ったの。私、フェイトちゃんと毎回、全力全開で、私の譲れない気持ちもが通じるように戦ってみる！」
「ああ、その意気だ」
「じゃあ早速、訓練！いいでしょゼッドさん」
「ま、やりすぎない程度にな」
　ゼッドはただ静かに、魔法という非日常で出会った少女に共感し、親しくなろうとするなのはを見守った。
　それはゼッドだけではない、日々魔法のことで報告を受けるなのはの家族達もだ。
　最初、ゼッドが守るというはずだったのに、なのはが同じ魔法少女と戦うかもしれないという事態は、当然歓迎されなかった。
　しかし戦いを望んだのはなのはであり、ゼッドがもし本気で戦うなら生き死にの話になるという事と、恐らく相手はなのはと同い年程度だと解ると、その態度も軟化した。
　ジュエルシードを集める理由は確かに怪しい。

だが頑張っているなのはと同い年の少女に、多少同情する余地はあるということで。
なのはがフェイトと直接戦う許可は降りた。
その許可が降りた側面には、撃墜……空を飛ぶ魔法少女同士の戦いは空戦になることから撃破されることをいう……されたら、かならずユーノとゼッド、どちらかが受け止めるという説得も、また許可が降りる事を後押ししたのかもしれない。

さて日と場所を移してここはなのはが通う私立聖祥大学付属小学校。
貴重な学校生活での休憩時間。
なのははアリサとすずかに挟まれて色々と聞き出されていた。
「ねぇなのは。あんた温泉行く前くらいはなんかちょっと悩んでるかなーって感じしたけど、温泉の後少ししたら、なんだかすっきりしちゃったわね」
「そうだね。なのはちゃん、ちょっとぼーっとしてたのがさっぱりなくなっちゃった」
二人の言葉に困ったように笑いながら、なのはは言った。
「もー、ぼーっとしてたのは酷いよ」
「でも、ねぇ？」
「うん。してたよね。お茶会の後くらいかな。ユーノくんとなにかあったの？」
「え、別にそんなこと無いよ……っていうかなんでユーノくんなの？」
きょとんとするなのはに、アリサがにやりと、すずかがくすりと笑って言った。
その表情はいたずらっぽさに溢れている。
「だってねぇすずか。今まで男の影なんて全然なかったなのはにホームステイで男の子が急接近だなんて」
「そうだよね。なのはちゃんについにボーイフレンドができたのかなって」
「えええ!?なんでそーなるのぉ!?」

「ほらほら、なのはぁ。正直なところいっちゃいなさいよ」
「ななな、なんで私だけそんな……男の子との話がないのってアリサちゃんもすずかちゃんも一緒でしょ!?」
　必死の抵抗を試みるなのはに、アリサはさっと胸を張って答えた。
「とーぜんじゃない。私を誰だと思ってるのアリサ・バニングスよ。私の横に並ぶなら、男の方にもそれなりのステータスがないとね。あ、これ厭味じゃなくてそうじゃないと男の方がひがんだりしたりして困るって事よ」
「そうだね。アリサちゃんのおうちみたいなお金持ちが相手だと、男の子も萎縮しちゃうよね」
「いしゅ……なに？」
「萎縮。ちぢこまっちゃって、自由に出来ないって事」
「あ、なるほど……アリサちゃん大変だね」
「そ！それにこれって私だけじゃなくてすずかもよ。運動できて勉強できて、お金もある。下手な男じゃ相手にならないわ」
「うーん。私は相手の子が私の事を受け入れてくれればそれでいいんだけどね」
「だからー！そのハードルが高いっつってんの！」
「うわぁ……アリサちゃんもすずかちゃんも大変だね」
　ちらりとお金持ちの苦労というのを垣間見て感心するなのはだったが、アリサのターンはまだ終わっていなかった。
　なのはのほっぺをつつきながら話を元に戻した。
「だ～か～ら～、一番男と仲良くなりやすそうで、あんな可愛い男の子と一緒に居るなのは、あんたがまな板の上に乗るのよ！」
「ふ、ふぇぇ!?酷いよアリサちゃん！」
　なのはがご機嫌なのは、ずっと見付からなかった自分のやりたいこと。
　つまり魔法にまい進しているからなのだが、それをアリサとすずかに言うわけにはいかない。
　困ったなぁと思いながら、都合がいいのも事実で、ユーノくんごめんね、と内心謝るなのはだった。

そんな風に、魔法に学校にと、充実していたなのはが放課後アリサとすずかが習い事で一緒に帰れなくなったある日。
ユーノとゼッドと共にジュエルシードの反応を捜すべく、そろそろ夕食の時間になると言う時間まで探索を行っていたのだが。
急速に発達する雲、暗闇に覆われ光を失う街並み、そしてビルの隙間から海のあるはずの方向に見える遠雷という、少し異常な事態。
これを見てユーノはなのはとゼッドを近くに寄せて言った。
「大変だ。これはきっとジュエルシードを強制発動させて発見する為の魔法だ」
「え、強制発動？そんなことしたら危ないんじゃ……」
「その通りこんな探し方するの、きっとあの子達だと思う」
「そんな……」
「そんなことより、間に合え！封時結界！」
ユーノが展開した結界が光を失った都市の中にある、ジュエルシードの発動源に展開され、外部と切り離しを行う。
そしてユーノと共にジュエルシード発動の感覚を肌で感じたなのは駆けながらレイジングハートをセットアップする。
ゼッドは、ただ黙ってその後に続く。
もしかしたら彼は既にこの事件、自分の出番はもう殆ど無いと思っているのかもしれない。
すでになのはなら思念体程度なら彼の援護無しでも十分対処できる。
問題点はフェイトとの勝負くらいなのだ。
ただ、それでも彼はなのはに付いて行く。
万が一が無いように。
「フェイトちゃん！」
「なのは……」
ジュエルシードの胎動が始まっていた現場で、なのはとフェイトは相対した。
だが、その眼に憂いは無い。

ただ互いにジュエルシードを封印し、相手から勝ち取ることだけを考える。
「レイジングハート、お願い！」
「了解です。シューティングフォームにセットアップ」
レイジングハートの形状が変わる。先端の月の輪のようだった金色のパーツがUの字型になり、柄の部分が引き伸ばされる。
「バルディッシュ、やるよ」
「了解ですマスター。シーリングフォームセットアップ」
フェイトも、バルディッシュの形態を変化させ、バルディッシュの先端を竜のアギトの様に横たえて射撃体勢に入る。
そして封印魔法を発動させたのは同時だった。
「リリカルマジカル！」
「ジュエルシードＸＩＸ、封印！」
ジュエルシードを中心に、はじける桃と金の光。
しばらく拮抗し、のたくったそれは、しばらく経つと無事にジュエルシードの封印を完了させる。
ゆっくりと、歩いてお互いの元へ向かうなのはとフェイト。
そしてジュエルシードを挟んで向かい合う。
「また、勝負だねフェイトちゃん」
「私は、負けない」
「うん。フェイトちゃんの譲れない気持ち、解ってる。だけど私も、ユーノくんとの、友達との約束の為に譲れないから」
「じゃあ」
「勝負だよ、フェイトちゃん！」
お互い、それを合図に宙に浮き一旦は距離を取る。
そして、結界に包まれた街の中を桃と金の砲撃魔法が交錯する。
時折、フェイトが高速移動魔法でなのはの懐や背後に回ってサイズフォームで格闘戦を仕掛けるが、なのはもすでに慣れたもので。
プロテクションや自らも修得した移動魔法を使って逆にフェイトの背後を取ってみせる。
数週間前、二人の間には明確な技量の差があった。

だがそれもなのはのたゆまぬ努力と、それに協力するユーノ、レイジングハート、ゼッドの助けもあってフェイトに並ぶまでに成長していた。
フェイトが弱いわけではない、なのはの魔法に対する適正が異常といってもいいレベルなだけだ。
才能を持ち、その道を好み、努力を怠らない天才性、実戦を感じさせる模擬戦の相手。
これらが合わさってなのはという華は急速に花開いたのだ。
幾度目かの接近戦をいなし、フェイトに誘導弾を向かわせながらなのはは叫ぶ。
「最初は、私は守られてばっかりだった！」
その言葉に、フェイトの顔が一瞬険しくなる。
そんな彼女は瞬く間に迫る誘導弾を切り捨てる。
「でも、フェイトちゃんと出会って、それだけじゃダメだって思った！」
誘導弾を切り捨てたフェイトが、僅かに照準を変えながらフォトンランサーの光をなのはへ向けて走らせる。
なのははこれをプロテクションでは防がず、飛行魔法の軌道だけで回避する。
「戦うって決めたなら、一人でも戦う気持ちをちゃんと持たないといけないって、フェイトちゃんを見て思ったから！」
「私には、アルフが居る！」
「そういう事じゃないの！助けてくれる人がいるのはいいの、でも、もしその人がその場に居なかったら……そんな時にも、立ち向かう気持ちを持たなきゃいけないって、そう思った！」
回避を終えたなのはは、しっかりと空に大地があるかのように身構えると、レイジングハートをシューティングフォームに変えて砲撃の為のチャージを始める。
「それに気づかせてくれたのはフェイトちゃん、貴女なの！だから私、フェイトちゃんと友達になりたい！」
「……友達……」

「だから、フェイトちゃん。ジュエルシードの取り合いが終わったら……」
「くっ、私には、母さんとアルフがいればそれでいいんだ！」
　高速移動魔法で、フェイトはいまだに収束の甘いなのはの砲撃準備中を狙って一気に距離をつめ、その首筋にサイズフォームのバルディッシュの魔力刃を突きつける。
「魔法の組み立てが甘い。私の、勝ち」
「にゃはは。また負けちゃったね……あのね、フェイトちゃん」
「……なに」
「私が勝ったら、お願いがあるんだ」
「無意味、私は負けない」
「聞くだけ聞いて。私が勝ったらね、お互いの名前をきちんと呼んで、友達になろう」
　首元に刃を突きつけられても笑顔でそんな事を言うなのはに毒気を抜かれたのか。
　フェイトはバルディッシュを通常フォームに戻し、なのはに背を向けて言う。
「勝負は私の勝ちだから、貰って行くね」
「うん。ジュエルシードの所まで一緒に行こう」
　こうして、一方通行に見えるが二人の交流は続いていったのだ。
　そしてジュエルシード置き去りにされた地点では、ゼッドとユーノが巧い事フェイトの為にジュエルシードをせしめようとするアルフとにらみ合いになっていた。
「あんたらさぁ、頼むよ。ジュエルシードを譲っておくれよ」
「全部、あいつらの勝負の結果次第だ」
「そんな硬い事言わずにさぁ。あの子にはどうしても必要なんだよ」
「だ、ダメです！僕は発掘した責任者としてロストロギアを無事にしかるべき場所に送る義務があります！」
「ちっ、なんだい随分けち臭いね。要はあんたらはこの街でジュエルシードが発動しなきゃいいんだろ？なら封印した後はゆずってくれてもいいじゃんか」

「なのはは僕がジュエルシードをきちんとした人達に預けるのも込みで手伝ってくれてるんだから、そういうわけにもいかないよ」
「あーもー、ああいえばこういう。あんた頭硬いね！」
言い合うアルフとユーノの間でゼッドは殆ど喋らず、ただなのはとフェイトを待つ。
どの程度待っただろうか、ゼッドの眼がフェイトに続いて飛んでくるなのはを捉える。
「おい、来たぞ」
ゼッドの言葉に、今まで喧々諤々としていた二人はそれぞれの友達、主人の下へと駆けて行く。
「フェイト、フェイトォー！どうだったんだい!?苛められなかったかい!?」
「なのは！大丈夫!?」
駆けながら声を張り上げる二人に、フェイトは珍しく小さく微笑む。
なのはは申し訳なさそうに手を顔の前に立てて頭を下げる。
その反応の違いに、アルフは喜びの声をあげ、ユーノは小さくため息をつくが、念話で怪我の有無などを聞いてなのはを気遣う。
〈なのは、怪我は無い？〉
〈えと、それが、また首元にしゅってやられて負けちゃったからないよ〉
〈それならいいけど。これからも毎度なのはが一人で戦うのかと思うと僕は心配だよ。不慮の事態だってあるんだからね〉
〈ありがとうユーノくん。でも大丈夫。フェイトちゃんは、きっと優しい子だから。そうじゃなきゃ、あのアルフさんだってあんなに気にかけないよ〉
〈そうだといいんだけどね〉
念話を終えて並んだ二人がフェイト達の方を見ると、ゼッドの前でジュエルシードをバルディッシュに格納している所だった。
アルフがさすがフェイト！だとか、こんな甘ちゃん連中に負ける鍛え方なんかしてないもんねぇ！とか。

とにかくフェイトをべた褒めにする様子が伺える。
だが、フェイトは冷静にアルフを伴うと、結界の外へと消えていった。
そして、なのはとユーノがゼッドの所にたどり着くと、ゼッドは一言言った。
「負けちまったな」
静かなその言葉に、なのはは少しだけ、自分のわがままでこういう状態になっていることを考える。
だが続くゼッドの言葉はなのはを責めるものではなかった。
「まぁ、生きてればいい。生きて次に向かえる希望がなくなってなけりゃあ、また戦える。だから早く帰ろうぜ。桃子さんの飯が待ってる」
そういって結界が解除され、ジュエルシードを発動させる魔力が去り電灯と人の気配が戻ってきた街の中を、高町家へと向かって歩み始めた。
ゼッドの言葉は、なのはの少し萎れそうだった心を元気付かせ、次がある！という思いを抱かせた。
〈レイジングハート、今度こそ勝つためにも、訓練よろしくね〉
〈やりすぎにならない程度になら喜んで〉
もう一人の魔導師が現れ、荒れるかと思われた世界だが、そんなことは無かった。
それはなのはの心がフェイトに届いたからか。
あるいは、届くように場を作ったゼッドの力なのか。
とにかく、物語はいまだ穏やかな姿を見せ続けていた。

思い続けたい気持ちなの

なのはは、違う、と感じた。
何が違うのか。
それは、あのフェイトとの勝負の敗北の翌日、新たなジュエルシードの発動を感じ取ったことから始まる。
フェイトと協力するように樹の怪物へと変貌を遂げたジュエルシードを二人がかりの砲撃で倒し、ジュエルシードをゼッド達に預けて試合を始めたのは良い。
だがその試合の戦闘のフェイトの攻撃の一撃一撃が、あくまで試合だったものではなく。
殺すほどの気迫を込めて打ち込んできていると感じた。
この一日で、何があったのかは分からない。
だが、元から無表情だったフェイトの顔を更に凍てつかせ、こんな恐ろしい気持ちを込めた攻撃をさせるに至るその理由を、なのはは知りたがった。
「どうしたのフェイトちゃん！この間と全然違うよ！なんで、なんでこんな……！」
なのはの声に、フェイトは答えない。
ただひたすらに後退してフェイトを引き離そうとするなのはにまとわり付くように飛行し、サイズフォームで切り裂こうとする。
「フェイトちゃん！お話を聞かせて！お願い！こんなの、フェイトちゃんらしくないよ！」
フェイトはなのはの呼びかけに表情を険しくすると、退いて攻撃をかわすなのはに近距離からの射撃魔法を行使する。
「バルディッシュ、アークセイバー」
「アークセイバー、発射します」
下手に実戦慣れしてきた為、なるべく小さな動きでかわそうとしていたなのはに、予想外のリーチをもたらすアークセイバーが直撃する、その直前。
「プロテクション」

なのはを助ける為にレイジングハートが自発的にプロテクションを展開し、ギリギリでアークセイバーを受け止める。
だが三日月状の射撃魔法のアークセイバーにはバリアブレイクの特性があり、プロテクションは小爆発を起こす。
「きゃあ！」
「今っ」
僅かに姿勢を崩したなのはに、フェイトの振るうバルディッシュが迫る。
なんとかレイジングハートを引き寄せ、バルディッシュを防ごうとしたなのはだったが、そこに割り込む影があった。
「ストップだ！君達は封印を施しはしたものの、ロストロギアの近くでこんな魔力戦をするなんて何を考えているんだ！」
なのはを切り裂かんとしていたバルディッシュを大きな円盤が先端に付いたデバイスで受け止め、なのはが防御姿勢を取ろうとしていたからか、彼女に対しては手を向けるだけに留まる。
「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」
「時空管理局、ようやく来てくれたんだ……」
戦うなのはとフェイトをとめた黒いコートのバリアジャケットの少年を見上げながら、ユーノが呟く。
一方、それまで以前のようなユーノとの口論をすることなく、フェイトの使い魔として本来の姿の獣の形態で戦いを見守っていたアルフが、ギリと歯を食いしばる。
「二人とも、武器を引いて武装解除するんだ」
そういってなのはとフェイト、二人の動きを制するように高度を下げさせるクロノ。
二人を地上に降ろし、更に執務官としての警告を続けようとした時、アルフが行動にでた。
三個のオレンジ色の光を曳く光弾をクロノに射出しながら叫ぶ。
「フェイト、撤退だよ！離れて！」
叫びながら、光弾を容易く弾いたクロノへ更に攻撃を仕掛けるべく

さらに雷球のような魔法を放つアルフにその場を任せる。
そして、若干距離の開いてしまったジュエルシードの元へと飛び上がる。
「フェイトちゃん!?ダメだよ!まだ勝負は……」
なのはの引き止める声を振り払うように、速度を上げたフェイトはジュエルシードのもとへ向かう。
それを援護するアルフの放った魔法を避けるため、なのはとクロノが飛び退る。
しかしクロノは直射型の魔法の弾幕を張ることでフェイトを止める、かと思われた。
「何をするんだ!?君は!」
クロノの放った魔法は、全てスペルシャードを盾にしたゼッドによって防がれた。
ゼッドは静かにフェイトに向かって言った。
「どう見ても今回もまたなのはの負けだった。持ってけよ。約束、だろ」
思わず固まったフェイトだったが、苦しそうな顔をした後ジュエルシードをバルディッシュに格納すると、アルフと共にどこかへと飛んでいこうとする。
クロノは苛立ちを覚えながら、その後姿にさらに魔法を打ち込もうとするが、今度はなのはにそれを阻まれた。
「撃たないで!約束なの、私とフェイトちゃんで勝負して、勝った方がジュエルシード持って行くって。だから!」
自らのデバイスの前に自分から飛び出したなのはの行動に、さらに何を悠長な事をという苛立ちを募らせたクロノだが。
それをむっつりとした厳しい表情に変えてなのはに言った。
「君は自分のしていることがわかっているのか。ロスト・ロギアは玩具じゃない。子供の石取りみたいにやりとりしていいものじゃないんだぞ」
「解ってるよ。でも、約束だから……ごめんなさい」
フェイトが飛び去り、肩を落とすなのはにクロノはため息をついて

から言った。
「まぁ事情もまだ飲み込めていないし。話は次元空間航行艦船アースラで聞く。当然、僕の邪魔をしたあの少年もだ。よろしいですか艦長」
それで取りあえずの話は終わりだというように口を引き結び、ゼッドを睨むクロノ。
その様子を、アースラに居る彼の母リンディ・ハラオウンはモニターしていた。
それとリンディは同時に逃げ出したフェイトとアルフが多重転移で逃亡を行った為、追跡失敗の報を受ける。
「戦闘行動は迅速に停止させるも、謎の少年の妨害でジュエルシードの確保はならず、か。この一手が後々痛いことにならなければいいけれど」
呟いた彼女の表情は、少し固いものだった。
だが、彼女はすぐにそれを消し、意図して少し険しい表情を出しながら、クロノの元へ空間投影ディスプレイを出現させ、なのは達に話しかける。
空中に投影された長い翠の髪をポニーテールにした女性の険しい表情に、なのはがうな垂れる。
「私はアースラの艦長、リンディ・ハラオウンです。貴方達に今回のような行動にでた事情を聞く必要があると判断しました。そちらに居るクロノ執務官の誘導に従って、アースラに来なさい」
リンディが意図的に固めた言葉の感触に、なのはは母に叱られたかのような気分になりながらも、小さくはい、とだけ答えた。
ユーノは何かの決意を固めたように、口を引き結んでいた。
そしてゼッドはというと、全てを受け入れるようにただ静かになのは達の傍に降り立った。
こうして三人は時空管理局の指揮下にある次元空間航行艦船、アースラに乗り込むことになったのだった。
クロノに誘導されながら、なのははユーノにアースラについて色々

質問をしていた。
だがゼッドだけは無言。
彼にとっては、アースラという船がどういうものなのかというのは些細なことなのかもしれない。
あるがままを受け入れ、そうすることで精神の調和を図り強さを養う。
彼の師匠だった男の言葉だ。
その後は、クロノがなのはにバリアジャケットとデバイスの解除を進めたり、細かいことはあったが。
すぐに三人は艦長であるリンディの元へと通された。
通された場所は無機質な大きなデスクと、いくつもの椅子が並ぶ小さな会議室のような場所だった。
なのは達は参考人ではあるが、微妙な立場である。
主にゼッドの行動によって。
もしゼッドがクロノのジュエルシード確保を邪魔していなければ、もっと柔らかい対応もあっただろうが。
あれのおかげで個別に取調室に入れられなかっただけ御の字、という状況だ。
そして聴取が始まった。
「なるほど、そういうことですか。貴方がジュエルシードの発掘者なのね」
「そうです。そして、独断で現地協力者を作り、危険な戦いをさせた人間です。なのはとゼッドさんに罪はありません。全て僕の責任です」
「そこまで言わなくても……とは思うし、事実そうなんですけどね、特に……先ほどのゼッド君？の行動は、貴方の責任ではないように見えました」
リンディはユーノには柔らかい対応をしつつ、ゼッドに警戒心を見せて見せる。
こうして言外にゼッドにさきほどの行動の理由を話せといっているのだ。
「回りくどい言い方は好きじゃねえ。だから言わせて貰うが、なのは

とあいつ、フェイトは一対一の勝負で封印後のジュエルシードの争奪戦をしてた。俺はそこのクロノって奴が割り込んだ時点でなのはが負けたと思ったから、取り決めどおりフェイトの奴にジュエルシードを渡しただけだ」

何の迷いも気負いもなく、自分は自分の思うことをしたと告げるゼッドだが。

それですませられない立場なのが時空管理局の執務官であるクロノである。

「君達は本当にあのジュエルシードの危険性を解っていて、そんな事を言っているのか!?あれは次元干渉型の遺物で、下手をすれば次元断層という、世界を崩壊させかねない事象を意図的に起こせるものなんだぞ！」

「そんな……僕達はジュエルシードが願い事をいびつに叶えるくらいの危険性しか知らずに……」

「そんな程度で済む物じゃないんだアレは。発掘しただけのユーノ君には伝わりきっていなかったのかもしれないが、今まで次元震の予兆すらなかったのが不思議なくらいだ」

「えと、じゃあ、もしかして私の我がままのせいで……」

「この世界だけでなく、下手をすれば亜空間を挟んで隣り合う世界まで滅ぼす事になっていたかもしれないな」

「……」

なのはは、街一つどころか複数の世界が滅ぶ危機だったと知らされて蒼白になって黙り込む。

ユーノに至っては、誤った知識で他次元の多くの人々を巻き込む所だった事に愕然としている。

さすがにゼッドもクロノの言葉には小さく、マジかよ……と呟いて驚きをあらわにする。

「自分達のしていた事の危険性は十分理解してもらえたようね。では、これ以後ロスト・ロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

「君達は今回の事は忘れてそれぞれの世界に戻って欲しい……と言い

たいところだが、恐らく時空犯罪者を庇ったゼッド、君については多少の責任問題が発生すると思う」
「好きにしろよ。牢にでも何でも入ってやる」
「……開き直っている、わけじゃないようだな。覚悟の上での行動か。なら僕達時空管理局は今このときを持って君を拘束する」
　重々しく宣言し、アースラにのる武装局員を呼ぶクロノだが、それになのは達が思わず反応する。
「拘束だなんてやめて！ゼッドさんはジュエルシードを探し出す最初から、ずっと私達を守ってくれた優しい人なの！」
「そうはいってもな。あの行動は明確に執務妨害だった。ジュエルシードの真の脅威を知らず、という点で酌量の余地はあるかもしれないが。規則は規則だ」
「そんな……ゼッドさん！」
　不安げに横に座るゼッドを見上げるなのはに、ゼッドは眼を閉じて澄ました顔で言った。
「心配するな。牢に入るのには慣れてる」
「な、慣れてるって……」
「うーん、牢に入るのに慣れている、というのは少し気になるけれど。とりあえずそれはおいて置いて」
　リンディはなのはとユーノに言った。
　その表情は柔らかい。
「とりあえず、貴方達の冒険はここまで、お家に帰ってご家族を安心させてあげなさい」
「えっと、あの！」
「なにかしら？」
「次元……震ですか？それは知りませんけど、私がジュエルシードを捜しているのは家族の皆は知っています！」
「何が言いたいの、なのはさん」
「私に、チャンスをください！フェイトちゃん、昨日戦った時はもっと優しい子だったんです。それが、今日になって、氷みたいに自分を冷たくして……私、その理由が知りたいんです！」

「それは、ジュエルシードの回収に協力したい、と言う解釈でいいのかしら？なのはさん」
「はい。お願いしますリンディさん」
　真っ直ぐにリンディを見つめるなのはの視線を受けて、少し困った顔を浮かべるのを見て、ユーノはなのはの方を向いて説得する。
「だ、ダメだよなのは！時空管理局が出てきたんなら、もう彼らに事を任せるべきだ！悔しいけど、僕らは素人なんだから……巧くできる人に任せた方がいい」
　最後には、無力感をだしてなのはを止めるユーノだが、そんなものでなのはは止まらなかった。
　なのはの心の中は、フェイトのことで一杯だった。
　何故あんな冷たい顔をするようになってしまったのか。
　どうしてもそれが知りたかったから。
「ジュエルシードを賭けての勝負をさせてくださいとはいいません。ただ、フェイトちゃんを止めて、話を聞きたいんです！お願いします！」
　友達になりたい、今この事件を管理局の人達に任せたら、きっとそのつながりの糸は切れてしまう。
　そう思って、なのはは精一杯の気持ちを込めて頭を下げた。
　彼女の様子に、リンディはため息をつきながらも、優しい目で言った。
「解りました。貴方の希望を聞き入れましょう。身柄は一時的に時空管理局の預かりとします。そして、私達のいう事にはきちんと従うこと。それが貴方の事件の捜査への参加条件です」
「母さん!?」
「クロノ、貴方のことは信用しているわ。でも、ここまであの黒い少女と渡り合ってきたなのはさんも、内に秘めたものがあるはずよ。そしてやる気は十分。もしここで下手に排斥すれば制御をなくして暴走するかもしれない。なら、きちんと指揮下に置くのが正道でしょう」
「それは、そうですが」
　幾分、納得できなさそうなクロノから、それ以上の反論は聞きませ

んと言うようにリンディは視線を外し言った。
その表情は時空管理局の艦長ではなく、同じ保護者として言い聞かせる顔だった。
「ご家族は既に事情をご存知だと言っていたわねなのはさん。明日、私の方からも顔をだして改めて貴方を指揮下に加えることを説明します。今日は家に帰ってご家族と話しなさい」
「はい……解りました」
まだフェイトと繋がれるかもしれない、そんな希望を胸に明るい顔を見せるなのはの横から、ユーノも声を上げる。
「こうなったら僕も協力します。やっぱり、ジュエルシードは僕の掘り出したものだから。できる事があるならやりたいです」
「解りました。ユーノ君もなのはさんの家に帰る？」
「ゼッドさんが帰れない事情の説明もありますし、なのはがよければ」
「あ、そっか。ゼッドさん帰れないんだ……」
「残念だけれど、ね」
「じゃあ、一緒に帰ってくれるかな、ユーノくん」
「うん。僕じゃちょっと頼りないかもしれないけど。きちんと説明してみせるよ」
話がまとまったなのはとユーノがクロノに伴われて部屋に出て行く。
そして、部屋にはリンディとゼッドが残った。
「ゼッド君。貴方はこれ以上の協力は認められません」
「一度噛んじまった事件だ。最後まで付き合うぜ」
「いけません。あなた、魔力がないでしょう。そんな人間を事件に関わらせて危険に晒す訳には行きません」
「魔力、か」
「ええ、戦う力よ。貴方には無いでしょう」
「戦う力ならあるさ」
「でも魔力が無い貴方がどうやって戦うの。質量兵器を持っているわけでもないのに」
疑問の声を投げかけるリンディに、ゼッドはぽつりと呟いた。

「部屋だ。広い部屋を用意してくれ。そこで力を見せる」
訝しげな顔をするリンディだったが、これまでなのはと共に戦ったという少年の未知の力を確認する為に。
それが危険なものでないか確認しようと、訓練室の開放と、ゼッドの監視役にクロノを任じた。
そして、アースラ内で魔法を磨く為の訓練室にゼッドは案内される。
ゆっくりと部屋を見回したゼッドは頷くと、クロノを少し下がらせた。
そしてゼッドは左腕を掲げ、叫ぶ。
「来い！ランボス！」
部屋の中を球形の色の無い光が満たす。
クロノが視界を取り戻すと、そこには燃え盛る炎のような赤い羽毛につつまれた上半身と、黄色い足ををもった巨大な鳥人が現れていた。
「召喚魔法!?いや、魔力は感じなかった……これが、君の力、なのか？」
「全てではねぇけどな。ただこの力は殺さないようにとか手加減の聞く力じゃねえ。それを良く考えてくれ」
「……解った。それならそれで使いようはあるさ。艦長に申告しておく。だが、君の監視をすぐ外すわけには行かない。この後は事情聴取室に来てくれ」
「ああ」
ゼッドは更にクロノの後について歩くが、その顔に不安や恐れと言ったものはまたく無い。
恐らく事情聴取される時になってもリンディとの接見でいったのと同じ事を言うだろう。
彼は、少なくともあの時は間違ったことをしているとは思わなかった。
それを曲げて言い訳をしたりはしない。
ある意味で傲慢だが、強い心の持ち主だから、どんな叱責が飛んでくるかを恐れない。

恐れないだけだから、当然聞く耳はある。
なのはにフェイトとの勝負を許し、見守ってきたのもジュエルシードが危険と言っても、さきほど出現させたランボスのような。
ちょっとしたモンスターのようなものが危険という認識だったからだ。
情報が入り、その危険度が極端に上がったとなれば、彼もその考えを改めないわけには行かない。
こうして、ゼッドも数時間にわたる事情聴取の末、黒い少女達にこれ以上味方する存在でないと確認された後、条件付で活動する臨時管理局員として登録されることになった。
一方その頃、なのはの方はというと、夕食後に、家族の皆が揃っている前で、きちんと全てを話した。
今まで危険だったものが、より危険を孕む事を知った事、それでも魔法少女として皆を助けたいという気持ち。
そして何より大切な、フェイトときちんと友達になりたいという思いを告げた。
すると、まずは桃子が口を開いた。
「なのは、私なのはが心配よ。だって、下手をすれば世界が壊れちゃうようなものの所に娘をやるんだもの。当然よ」
母の心配の言葉に、心配をかける事に罪悪感を感じたなのはが俯くが、桃子は言葉を続けた。
「でもね、なのはが本当に、心から決めたことなら。前に行ったように邪魔したりしないわ。ちょっと寂しいけれど、見守るのもお母さんの仕事ですものね」
そして、最後に、辛かったら何時帰ってきてもいいからね、と言って締めた桃子の言葉に、なのはは涙ぐむ。
続いて自分の信念を通しなさいと語りかける士郎の言葉も、なのはの涙の量を増やした。
恭也も、美由希も、自分を心配してくれる家族の言葉に、ジュエルシードに関わる前、どこか疎外感を感じていた家族に対して。
自分は本当に愛されていると感じられて、なのはは泣いた。

泣いたなのはに、士郎が、桃子が、恭也が、美由希が寄り添う。
それは、とても暖かな時間で。
なのはの明日からの戦いの活力になったのだった。

それは悲しい想いなの

リンディが高町家で時空管理局の任務と、それに関わろうとするなのは達の熱意を説明し、正式に臨時局員として所属することが決まった後。

なのは達、現地でジュエルシードの回収を行っていた三人がアースラの乗員に紹介された。

そしてそれから十日の間、ジュエルシードの一特定をアースラが行うことで五つのジュエルシードを発見していた。

だがシリアルＶＩＩＩ、ＸＩ、ＸＩＩしか確保できず、残る二つはフェイトによって確保されてしまった。

管理局が現れたことで影の中に潜むように行動をするようになったフェイトと、なのははいまだ対話を行えないで居た。

なのはたち管理局側が確保を確定しているのは八個、フェイトが確保したジュエルシードで確認できる数は、五個。

なのは達と出会う以前からフェイト達もうごいていたとしたら、おそらく残る数は六か七かという、状況。

多少不謹慎だが、なのははジュエルシードの残りの数が減るたびに、フェイトと出会う確立が減って行く、そんな気持ちになっていた。

そしてアースラの食堂でのこと。

なのはとユーノ、ゼッドは食事を取りながら話していた。

「浮かない顔だね、なのは」

「うん……こんなこと言っちゃいけないんだろうけど。フェイトちゃんと会えないのが、ちょっと寂しい」

「……まぁ、あの子も堂々と僕等の前に現れるわけにはいかないからね」

「それは解ってるの。でも、このまま事件が終わっちゃうのは嫌だなって」

「落ち込むなよ、なのは」

不安を湛えた瞳のなのはに、トレイに乗った固形食糧をかじりながら言うゼッドはあくまで自然体だ。

それは、僅かになのはの不安を和らげる。
「落ちてる分だけ拾ってはい終わり、って仕事じゃねえだろ。必ず直接お前とあいつがかちあう時は来る。心配するな」
「そう、だね。管理局の皆さんは、フェイトちゃんが持っていった分も回収しないといけないんだもんね。その時、会えるかな」
「きっと会えるよなのは。だから、僕達皆で頑張ろう」
「うん。ありがとうユーノ君。私頑張る」
そういうと、笑いあいながら食事を続けるなのはとユーノ。
そして、澄ました顔で全てをゼッドが平らげた時に、艦内に警報が鳴り響く。
それを聞いて、三人は立ち上がり、ブリッジへと走っていくのだった。

「一体何があったんですか!?」
勢い込んで駆け込んできた三人の中で、一番に声をあげたのはなのはだった。
それに答えたのはクロノだ。
「ああ、黒い少女。フェイトと言ったかな。彼女が大規模な魔力でジュエルシードを発動させて位置を特定した」
「フェイトちゃんが!?あの、私を現場に行かせてください!」
「その必要は無い。遠からずあの少女は力尽きて墜ちる。そこを確保すればジュエルシードも容易く確保できる」
「そんな……」
「君には辛いだろうが、話なら彼女をアースラに確保してからでもできるだろう。ここは万全の状態でジュエルシードを確保する為に待機してくれ」
「でも!フェイトちゃん、苦しそうだよ!放っておけないよ!」
「なのは。臨時局員になった時の約束、忘れたのかい」
「あ……う……」
クロノの正しい言葉に、なのはは折れそうになる。
でも感情がフェイトを助けなければいけないと訴えているのだ。

この状況で助けられなければ、友達なんて名乗れないと。
「それでもお願い、クロノくん。私、チャンスをくださいっていったよね。フェイトちゃんと話をするチャンスを」
「だから、それは彼女を確保した後に」
「今、出て行かないと私はフェイトちゃんに信頼なんてされないと思うの。だから、お願い」
必死に訴えるなのはを、ユーノも援護する。
「確かに敵の体力切れを待つのは有効だよ。でも、フェイトはすでに消耗してる。今からジュエルシードの封印に介入しても確保できる公算は高いと思う。だから、時間をかけて次元震発動のリスクを高めるより、勝負をかけたほうがいいんじゃないかな」
ユーノなりの、なのはへの精一杯の援護を聞いて、まったく君達はと呟いてからクロノは思考に入る。
「艦長、執務官である僕となのは、ユーノの三人で一気にジュエルシードを封印、制圧を行いたいと思います。許可をいただけますか？」
「……ゼッド君も連れて行きなさい、クロノ執務官」
「ゼッドを？しかし過剰戦力では」
「彼の呼ぶスピリットはジュエルシード発動中の障害から貴方達を守るディフェンスとします。クロノ、貴方は彼女達が転送で逃げられないようにサポートに徹して頂戴」
「なるほど……了解しました艦長。なのは、ユーノ、ゼッド。それでいいな？」
執務官として、三人に確認を取るクロノにゼッドが答える。
「文句ねえ。行こうぜ、あいつがダメになっちまう前に」
後は勝手知ったる他人の船とばかりに、ゼッドが戦闘になって転送ポートへと駆け込む。
そして、ユーノが転送魔法で全員を嵐吹きすさぶジュエルシード六個の発動点である、アルフの結界の中へ転移させる。
「あんたら！フェイトの邪魔はさせないよ！」
転送先では血気にはやる獣形態のアルフがユーノに躍りかかった。
だが防御魔法でそれをいなしたユーノはフェイトとアルフに声を

かける。
「今は戦いに来たんじゃないんだ！協力しにきたんだよ！」
「協力？管理局を背中にはっつけて、なにいってんだい！」
警戒をあらわにするアルフはひとまずおいて置いて、なのははフェイトに呼びかけながら傍へと飛ぶ。
「あのね！今は協力しよう！だてフェイトちゃん、もうぼろぼろで、見てられないよ。だから、封印、一緒にやろう」
レイジングハートから攻撃でも防御でもない、純粋な魔力がバルディッシュに受け渡される。
「フェイトちゃんからお話聞きたいけど、それは後。封印が終わったら、なんで急にあんな怖い攻撃をするようになったのか、教えて、フェイトちゃん」
「なのは……」
「さぁ、いくよレイジングハート！ディバインバスターフルパワー！」
「シューティングフォーム、セットアップ」
「バルディッシュ……」
「了解です。シーリングフォーム、セットアップ」
なのは達の準備はこうして整った、だがジュエルシードを含む渦の動きが止まらない。
ユーノがアルフに構わず拘束をしようと試みるが、その直前にゼッド叫んだ。
「こい！アミルガウル！」
左腕からは以前とは違う、翠色の光。
それは豪風を伴って現れ、何時しか灰色の髪に同色の角、そして頭や背中に翼を生やし、黄金の鎧を着込んだ翠色の巨人が立っていた。
その威圧感は凄まじく、その場に居る全ての人間が気圧される。
「アミルガウル！やれ！」
ゼッドの指示を受けてアミルガウルはたちまち立ち上る渦を、背中から抜いた翼の一対で振り払うたびに一個一個ジュエルシードを露出していく。
「いまだ！ユーノ！アルフ！」

さらに叫ぶゼッドの声に、二人は思わずジュエルシードを縛る魔法を発動させる。
それを見て、なのはとフェイトは頷きあう。
「ディバインシューター！」
「サンダー……レイジ！」
放たれたなのはとフェイトの膨大な封印魔法は、六個全てのジュエルシードを封印することに成功する。
それはアースラ側でもモニターしていた。
「なんてデタラメな力だ……なのはとフェイトという少女もそうだが、ゼッドの、アミルガウル。あれはロストロギア級じゃないか……？」
一人ごちながら、フェイトとアルフが転移を発動しないように転移を制御する結界を展開するクロノ。
そんなクロノの気持ちも露知らず、なのははフェイトに呼びかけていた。
「あのね、ジュエルシードは半分ことかいけないと思う。危険なものだから、ね。でも、フェイトちゃん、貴方を何が変えちゃったのかとか、そういう事情は話し合えば半分粉に出来ると思うんだ。それで、私、フェイトちゃんと重荷を分け合える友達になりたい」
「そんなこと、言ったって……」
「フェイトちゃん、あの時本当に冷たかった、それまでは闘いって言っても、どこか暖かくて、楽しいものだったのに。それを捨てちゃうなんて、どうしたの。教えて！」
「わた、私は……私は！母さんの子だから！完璧に仕事をこなさないといけないんだ！ジュエルシードで願いを叶える母さんを助ける為なら、私は、私は……！」
「フェイトちゃんがお母さんの為に頑張ってるのは解った。でも、その為に全てを振り切って戦うのは辛いんだよね。その辛さを、私に分けて。私、受け止めるから」
「う、うわぁぁぁぁぁぁぁあ！」
サイズフォームで斬りかかるフェイト、だがなのははそんなこと恐

れず、懐に飛び込んで、フェイトを抱きしめた。
「辛かったねフェイトちゃん。でも大丈夫だよ。フェイトちゃんのお母さんの願いだって、ちゃんとしたものなら管理局の人だって叶えて……」
なのはの細い体からは考えられないほどの強い力で抱きしめられたのは、栄養失調気味のフェイトには振り払えないものだった。
だから、最後の抵抗に泣いた。
「母さんに笑って欲しいんだ……優しい母さんに戻って欲しい……母さん、母さん、私どうしたらいいの……」
疲れ果て、もうどうしたらいいのか解らない管理局に囲まれた状況。
その全てを吐き出すように泣いていたフェイトだったが。
「何!?次元跳躍攻撃!?ゼッド!」
「なんだ!?」
「遠距離からの攻撃反応!防御を!」
「っ、アミルガウル!」
クロノがゼッドに指示をだした刹那、アミルガウルが舞う様にジュエルシードを近くに漂わせるなのはとフェイトを覆うように飛び上がり、舞い降りた紫色の魔力光を放つ雷を翼で払う。
それを見たフェイトが呆然とした顔で呟く。
「かあ、さん……?」
「お母さん?あの、フェイトちゃん、今の攻撃って」
「……」
何も言わずにうな垂れるフェイトに、なのははこれ以上この状態で問いかけtも、何も得られないと判断した。
脱力するフェイトの体を支えながら、なのははフェイトを元気付けようと頑張った。
「フェイトちゃん、アースラに行こう。そこで皆にしっかりおはなしするの。ちゃんと、大人の人にも話せば道はできるよ。だから、行こう。フェイトちゃん」
優しく、言い聞かせるなのはに、フェイトは全てを委ねるように抱

きしめ返した。
「あ、あのババァ！フェイトを狙うのはどういうつもりなんだ！やっぱり、やっぱりあの女、フェイトに愛情なんて無いんだ！」
「ちょ、ちょっとどうしたのアルフ!?あの女て誰さ」
「フェイトをいつも苛める鬼婆だよ！もう、我慢できない！フェイトが傷つくことになっても、あの女をどうにかしなきゃいけない！」
　今にも天に噛み付かんばかりの様子を見せるアルフをユーノが宥める。
「落ち着いて。まずはアースラで話そう。状況次第では、きっと君の主人であるフェイトも、そう悪くは扱われないはずだから」
「本当かい？本当に、フェイトを酷い目に合わせないかい？」
〈クロノ、アルフから情報が引き出せそうなんだけど〉
〈使い魔の考えることはすぐ解る。主人のあのフェイトという子は悪いようにしない、執務官の名に懸けて約束する〉
〈ありがとう、クロノ〉
　クロノとの念話をきり、ユーノはアルフを宥めるようにその鬣を撫でながら言う。
「大丈夫。執務官が証言するなら君達を悪いようにはしないって約束してくれた。だから安心してアースラに来るといいよ」
「うん。全部話すよ……あたしゃもうフェイトが苦しむのは、いやなんだよ。あの女の愛情を求めて、鞭打たれても頑張る姿を見るのは辛いんだよ。あたしも、疲れちまった……」
　うな垂れて搾り出すように言ったアルフは、付け加えた。
「管理局はともかく、あんたら三人は少しは信用出来そうだしね。少なくともあんたら三人は、自分達に出来る最後まで約束を守ってくれた。同じ様に、出来る限りフェイトのこと、また助けてやっておくれ……」
「解った。僕達もアースラの人達に悪くしないであげてってお願いしてみる。だから、きてくれるね」
「ああ、全部任せるよ」
　クロノはフェイトとアルフの両名が逃亡の意思も無くしたのを見

て、ジュエルシード六個を回収し、結界を解除。
アースラへの転送を開始する。
その際にリンディに念話を送る。
〈艦長。実行犯……恐らく従犯ですが、容疑者二名をロスト・ロギアと共に確保しました〉
〈ちょっと賭けの大きい出撃だったけれど、皆のがんばりで予想以上に上手い事事態が収まったわね〉
〈ええ。彼女達は少々理想が大きすぎると思いますが、上手くいってなによりです。案外、気持ちがいい〉
〈それは何よりね。しかしゼッド君のことだけれど〉
〈はい。次元跳躍攻撃をあっさりと防ぐあの召喚魔法の技術はロスト・ロギア判定もやむなしかと〉
〈後で彼と話し合う必要があるわね。とにかくお疲れ様クロノ。アースラも攻撃を受けたけれど、航行に大きな支障はないから。次はフェイトという少女を操っている人間の本拠地を攻めなければならないから〉
〈了解です〉
念話が終わると、全員がクロノの指示を待っている状態だった。
クロノは少しだけ思考を走らせると言った。
「なのは、君はその少女が少し参っているようだから医務室へ。この十日間で位置は解っているな？」
「大丈夫」
「よし。ユーノは待機、ゼッドは艦長のところへ顔を出してくれ。僕は、そのアルフという使い魔から事情聴取を行う。素直に話してくれるんだな？」
「いいよ。あたしゃフェイトの使い魔だ。ちょっとは精神リンクもしてる。だからフェイトがプレシアの奴をどんなに求めてるかは知ってる。でも、でももうあたしは、限界だっ」
よほど腹に据えかねているのか、見えないプレシア……恐らくフェイトの母だろう……に牙をむくアルフ。
その興奮を抑える為、勤めてクロノは冷静な声で伝える。

「全ての話は聴取室に入ってからだ。その後の証言は全て記録される。いいな」
「解った」
「よし、じゃあ行こう。ああ、ユーノ。さっき待機とはいったが、暇ならなのはを手伝ってくれてもいい。話すときは、二人きりがいいだろうが」
「うん。そうだね」
「よし、じゃあ各自解散。それぞれの場所へ行くように」
　指示を出し終わったクロノがアルフを伴って歩き始めると、なのは達からそれぞれから返事が帰ってきた。
「うん。フェイトちゃん、すぐゆっくり休める場所につれていくからね」
「手伝うよなのは。浮遊魔法の応用で運ぼう」
「解った。じゃあまたな」
　こうして、聴取室に連れて行かれたアルフは、首謀者であるプレシア・テスタロッサと娘であるフェイトの関係の実態と、本拠地である時の庭園の座標を全て吐き出した。
　そして、その上であれだけ警戒していた管理局の執務官であるクロノに、フェイトの事を何度も、何度もお願いして土下座までしかけるほどの勢いで処置を軽くするように頼み込んだ。
　これでクロノ達管理局側は重要な情報は一部手に入れたのだが、プレシアの動機という、事件の中枢となる部分は、いまだに謎のまま決戦に挑む事になると思われた。
　なのはとユーノはフェイトを医務室に連れて行ったが、検査の結果は芳しくなかった。
　ストレスと小食が重なり、健康面はすぐにでも適切な指導と治療を受ける必要があることが示された。
　それを聞いたなのはの顔が曇る、ユーノだってあまりいい顔はしない。
　だがなのははすぐに表情を切り替えた。
　泣きつかれて眠っているフェイトが起きた時、優しく迎えて上げら

れるように。
　自分を心配しながらも送り出してくれた、優しい母の顔はどんな顔だったかを思い出しながら、フェイトの寝顔を見つめ続けた。
　そして、リンディの元へ向かったゼッド。
　以前も使った会議室に二人きりで向き合う。
「ゼッド君。あのアミルガウルは何？」
「キースピリットだ」
「キースピリット？」
「神であるタスカーを復活させる鍵の内の一つ。それがあいつだ」
「神って……」
　唐突に飛び出した神という単語に驚きと呆れが混じった表情を見せてしまうリンディ。
　だがゼッドは気にした風もなく続ける。
「まぁ、あんたが考えてる神じゃねえよ。スピリットの元締めを神なんて呼んでただけだ」
「スピリットの元締め、ね。アミルガウルの力を見ればそれは大きな脅威だと思うけれど」
「タスカーはもう復活しねえ。アミルガウルは俺と一心同体になったからな」
「一心同体？でも貴方はアミルガウルを使役していたわよね」
　疑問の色を浮かべるリンディに、ゼッドも答えあぐねる様子でしばし眼を閉じる。
「あれはなんっうかな……あんたらの使う魔力も、身体と一体だろ？それを……放出してるっっーのか。そんな感じだ」
「では、先ほどのあれは全力ではないと？」
「さーな。それは試したことがねえからわからねえ。アミルガウルに全力を出させたら、俺がスピリットになるのか、俺とアミルガウルがまた分離するのか、な」
　これで語るべきことは語ったという表情になったゼッドに、リンディは続けた。
「思うに、貴方の事を時空管理局に報告したら、貴方は生きるロスト・

ロギアの認定を受けることになると思います」
「それがどうしたっていうんだ」
「最悪。私達アースラのクルーが貴方を拘束しなければならなくなるかもしれないという事です」
リンディの強い視線に、ゼッドは軽く笑って答える。
「まぁ少しなら付き合ってやるさ。でもな、俺の行く先を決めるのは俺だ、俺は自由にさせてもらうぜ」
「管理局の監視の眼を掻い潜る自信がある、という事かしら」
「世界は広いからな。事実あんたらはシャードキャスターを知らなかった。なら、あんたらの手の届かない世界なんていくらでもあるさ」
ゼッドの答えにため息をつくリンディ。
ゼッドは明確に言っているも同じなのだ。
現在関わっているジュエルシード事件に片がついたら、管理局に縛られるつもりはないと。
できればリンディとしてはゼッドに管理局に管理されるとしても、それは仕事を選ぶような穏やかな管理で、ただでさえ手の回らない管理世界の秩序を守るのに手を貸してほしいと思っている。
だがこの少年は突き詰めればどこまでも個なのだ。
その気になれば、なのはやユーノとの繋がりも断ち切って、行ってしまうだろう。
事件が収束に向かっている今、別れは近いのかもしれない。

全てを置いて、風は吹いたの

アルフの証言により次元要塞である、時の庭園の座標を割り出したアースラのクルーは攻勢に出ようとしていた。
赴くのは執務官であるクロノと武装局員の部隊、そしてユーノとゼッドだ。
なのはは、フェイトが目覚めた時傍に居てあげたいとアースラに残ることを選んだ。
艦長であるリンディは、ゼッド一人ですでに過剰戦力であるとすら思っている。
クロノや武装局員は、あくまで生身の人間であるプレシアを拘束する為の人員だ。
「クロノ執務官、及びに武装局員各隊、それと臨時局員であるゼッドさん、ユーノさん。今回の目的はプレシア・テスタロッサの確保している残りのジュエルシードの回収です」
「了解しました艦長。総員、戦闘準備」
「了解です!」
武装局員達の返事が集まり、怒号のような音になってクロノとリンディに届く。
「ゼッドさん、ユーノさん。お二人ともよろしいですか?」
「ああ」
「心の準備は出来ています」
「よろしい。では総員、転送ポッドから出撃!」
リンディの号令と共にアースラの転送ポッドに控えていたクロノを初めとする人々が時の庭園へと転送される。
事件は終着を迎えようとしていた。
転送先にはなんらかの防衛システムが待ち構えているかと思われたが、それが無かった。
クロノはその状況をいぶかしんだが、迷っている暇は無い。
プレシア・テスタロッサに対するため、自分とゼッドとユーノを戦闘に、プレシアテスタロッサが居ると思われる玉座の間へと急ぐ。

だが、その道のりにも妨害は無かった。
クロノはますます不可解な状況に思考の一部をまわしたが、結局その意味は解らなかった。
そして、時の庭園の中枢へとたどり着く。
「プレシア・テスタロッサ！貴女を時空管理法違反、及び管理局艦船への攻撃容疑で拘束する！」
柱が立ち並び、その奥に玉座に座るプレシアの周囲には五個のジュエルシードが浮かぶ。
それを武装局員達が取り囲む。
だが、彼女は気だるそうに椅子に座ったまま言った。
「足らないわ」
「何？」
「ジュエルシード……たった五個では、到底アルハザードには辿り着けない。私の夢も終わり、かしらね」
「……抵抗しないのか？」
「ふ、ふふふっ、あははは、あはははははは！抵抗！これは抵抗ではないわ！私のアリシアの復活を邪魔する化け物への報復よ！」
「な!?」
デバイス無しで魔力を制御し、それを放つプレシア。
その矛先は、ゼッドだった。
「報復ってのはどういうことだ」
プレシアの放った紫電だが、ゼッドは素早くスペルシャードを変化させた盾で防いでいた。
「私は、ジュエルシードを集めて忘れられた都アルハザードへ渡り、アリシアを蘇らせるつもりだった。それをことごとく邪魔されて、貴方は一体なんなの!?なぜ私達にこんな、こんな仕打ちを……！」
叫び、息を切らし、時折血を吐きながらゼッドに雷撃を放つプレシアだが、ゼッドはこれを全て防ぐ。
「貴方さえ、貴方さえ居なければ！私はあの人形を捨てて、アルハザードでアリシアと永遠に！」
盾を構え、雷撃をものともせず進むゼッド、そして彼は弱々しい放

電しかできなくなったプレシアの前に立つと、吼えた。
「うるせぇ！しったことか！アリシアとかいうのが何者かはしらねえ。だがあんたは間違った！死人に囚われて全て間違っちまった、大馬鹿女だ！」
　重い一撃が、明らかに弱っていたプレシアの腹部に入る。
「アリ……シア……」
　相当弱っていたのか、ただその一撃でプレシアは意識を失う。
　それを見てクロノが慌てて彼女の周囲に浮かぶジュエルシードを確保する。
「ゼッド、君はむちゃくちゃだ。大魔導師プレシア・テスタロッサの魔法を盾一つで防いで、一撃で意識を失わせるなんて」
　魔力を封じる拘束魔法でプレシアを捕縛したクロノの言葉に、ゼッドは淡々と答える。
「その女、元からかなり弱ってた見てえだな。大方海で仕掛けてきたのが精一杯だったんだろう」
「……なるほど、確かにあの魔法は魔力を大幅に使いそうだ」
「そういう意味だけじゃなくてな。そこの床見てみろ、血だ」
「血!?誰のものだ」
「多分この女のだ。もしかするととっ捕まえても先は長くないかもな」
「……病を抱えているのか」
「多分、な」
　言葉を交わし終えると、二人の間に沈黙が訪れる。
　そして、そのタイミングで武装局員達の一部が、玉座の後ろにある扉を開いて、中に収められていたものを報告する。
　それはフェイト・テスタロッサに酷似する、少女を納めたカプセルだった。
「もしかしてこれが彼女の言っていたアリシアか？」
「だろうな」
「アルハザードなんて、夢物語でしかないのに……本当に、さっき君の言ったとおりの女性だよ。プレシア・テスタロッサは」

フェイトには辛いことになりそうだ、と呟いてからクロノは武装局員達を集め、撤収の準備を始めた。
ユーノはその合間にゼッドに問いかけた。
「あの、あの人が言ってた人形って……」
「お前の想像通りだろ」
「でも、それじゃあフェイトがあんまりにも！」
思わず声を荒げるユーノに、ゼッドは言った。
「そのためのお前となのはだろ。しっかり支えてやれ」
「あの、ゼッドさんは？」
「そうだな。けりも付いたしここいらでおさらばといくか」
「え？そんな！なのはや高町の人達に挨拶は」
「そういうのは性分じゃねえ。ただ……」
「ただ？」
「なのはとフェイトの奴には言っといてくれ。お前らはもう、親に勝るとも劣らないつながりを持ってるってな」
「ゼッドさん……」
「本当に。俺の見るお袋って奴はどうしてこう……いや、なんでもねえ。あばよユーノ」
「ゼッドさん！本当に行っちゃうんですか!?」
ユーノの声にクロノがゼッドの方を向く。
「ま、待て！君には管理局へ出頭を……」
「しらねえよ。じゃあな」
ゼッドは背中から翼をあらわすと、そのまま中空へ浮かび、金環が連なる翠の空間の中へ飛んでいきその姿を消した。
「……魔力を使わない転移、だと」
「クロノ、移動先をサーチできる？」
「今アースラに問い合わせている！クソッ、事件が終わったら居なくなる予定だとは聞いていたが、早過ぎるだろう……すこしは事後処理にも付き合うといっていたのに、自分勝手な奴だ」
「そうですね……でもなんだか、ゼッドさんなら仕方ない気もしちゃうな」

「庇うのか？」
「なんていうか……出会ったときが唐突だったから、別れもそうなるんじゃないかなって、なんとなくね」
「そうか。はぁ。艦長になんと報告すれば良いんだこれは」
「ありのままをいうしか、ないんじゃない？」
眉根を掴むクロノに、開き直ったように軽い調子のユーノが返す。
こうして消えたゼッドを残して、プレシアを収監すべく、彼らはアースラに帰還したのだった。

その後、フェイトに寄り添って、目覚めた彼女とぽつぽつと改めて話をしていたなのはにもゼッド失踪の報が届けられた。
その時ばかりはなのはも思わずフェイトから意識を外して大声で叫んだ。
「私、ゼッドさんにずっと守ってもらったのに！お礼も言ってないんだよ!?なんでとめてくれなかったのユーノ君！」
「いや、止められないよ。だって本当に、すっと転移しちゃったから……」
「なのは……ゼッドって、あの銀髪の人？」
「うん。そうだよ。初めてジュエルシードの思念体と戦った時から、ずっと傍に居てくれた人なの」
「私にとっての、アルフみたいな存在？」
二人の間に、栄養剤の投与で僅かだが血色のよくなったフェイトが入り込む。
「えっとね、うーん、アルフさんほど口は出さないけど……背中がね、見てると安心するんだ」
「そう、なんだ」
「んー、表情もあんまり変わらないしね。あ、そういえばゼッドさんが笑ってるところ、私見たことないかも」
「本当に？」
「うん。優しい顔をしてたことはあったけど、ゼッドさんの笑うところは結局見てないの」

「……羨ましいな」
　ぎゅっと、なのはの服の裾を握って、フェイトが医務室のベッドの枕に顔を埋める。
「私も、そんな優しい人が居て欲しかった……」
「フェイトちゃん、それアルフさんに聞かれたらすっごく悲しむと思うよ」
「え……」
「だって、いつもアルフさんはフェイトちゃんの事一生懸命だったもん。だから、フェイトちゃんにとっての優しい人は、アルフさんだよ」
「そう、だね。そっか、そうだよね。アルフに、後でありがとうって言わなきゃ」
　弱々しく微笑みながら答えたフェイトに、ユーノがなにか言いあぐねかけ、それでも度胸を決めたのか、フェイトに報告する。
「プレシア・テスタロッサは逮捕されたよ」
　ユーノの言葉に、ビクリ、と肩を揺らすフェイトだが、ユーノは少し咳払いして続けた。
「これで君達母娘は管理局に捕まったわけだけれど……多分、フェイトの刑期はそう長くならないと思う。アルフの証言もあるしね」
「私の刑期が短くても……」
「何とか嘱託魔導師としての貢献作業なんかの手を使って、君の刑期を短くするから、君が真面目にやっていればまたプレシア・テスタロッサとゆっくり話す機会もできるだろう、だって。プレシアさんはちょっと、その精神の状態が良くないから、許可が降りるかは微妙らしいけど。それがクロノ執務官からの言伝」
「母さん……はは、ダメだな……どんなにされても、夢の中で私じゃない誰かを呼んでいても、私やっぱり母さんの娘だ。会いたいよ、母さん……」
　僅かに見えた希望に、思わず涙を流すフェイトを挟んで、ユーノはなのはに念話を繋げる。
〈なのは〉
〈なあにユーノくん〉

〈フェイトの出生には、ちょっと公に出来ない事情があるみたいなんだ。だから、それを知らされたときフェイトは凄く落ち込むと思う。だから、その時こそ助けてあげて〉
〈言われなくっても、助けるよ。私はフェイトちゃんの友達なんだから〉
〈そうだね。なのはは、ずっとフェイトと友達になろうとしてたもんね〉
〈うん！どんと任せて、なの〉
　こうして、ひとまずはなのはとフェイトの関係は、フェイトの裁判が終わる日までお預けとなる。
　だがメールのやり取りの約束をした二人は、じりじりとその仲を深めて行くことになる。
　一方、リンディとクロノは。
「ゼッド、広域指名手配になる可能性が高いですね」
「はぁ、そうね。彼が悪いわけではないけれど、あのアミルガウルは強力すぎるわ」
「そうですね、Ｓランクオーバーの魔導師の攻撃を撫でるように防いだあの力、確実にロスト・ロギア認定です」
「……いっそ報告しないのもありかしら」
「母さん！」
「冗談よ。多数のクルーが見ているのにそんな隠蔽、できるわけないわ」
　そんな会話を交わしてからため息をつきながら。
「まぁ、下手な藪を突いて蛇を出すようなことが無いように報告書には書きましょう」
「そうですね。ところでプレシア・テスタロッサですが……」
「フェイトさんには、辛いことになるわね」
「そうですね。いくら優れた人物としての前歴があったとしても、プロジェクトＦ．Ａ．Ｔ．Ｅやロスト・ロギアの奪取などを考えると……それこそ刑期は何百年になるか」
「きちんとアリシアさんの死と直面して受け入れられればいいのだけ

れど」
「それは……難しいかもしれないですね。でなければこんな事件は起こしていないでしょう」
「世界はこんなはずじゃなかったことばっかり、ね」
「そうですね。本当に、執務官をしているとそんな物ばかり見ることになりますよ」
「まぁそういってばかりも居られないのが私達の仕事よ。今回の件も、後始末までしっかりね」
「解っています」
暗い会話だが、事実をそうと認識するために必要な行動だった。
彼ら管理局の人間の仕事に、事実の認識は必要な事だ。
だから彼らはそれをしただけなのだ。

そして、なのはもアースラの面々、そしてユーノと別れる日がくる。
リンディに事件への協力を表彰された後、時空管理局の本部があるミッドチルダに航路を取る事に決定したアースラでユーノはスクライアに帰る事を決めた。
当然、その決定後すぐ別れるとなったわけではなく、きちんと高町家の面々に挨拶をしてから、だが。
そして、ゼッドの不在を残念がる高町家の面々との挨拶も済ませアースラにユーノが戻る直前、話題は魔法と、ゼッドのことになった。
「ユーノくんとも、お別れだね」
「うん。スクライアの皆が、家族が待ってるから」
「家族は大事にしないと、だね」
「なのは、魔法を悪用しないって、約束できる？」
「しないよ！ユーノ君やゼッドさん、それにフェイトちゃんと出会うことになった大切な力だもん。悪い事になんか、使わないよ」
「じゃあ、正式にレイジングハートはなのはにあげるよ」
「え、いいの？ユーノくんにとっても大事なんじゃないの？」
「僕は良いんだ。なのはとの相性もいいみたいだしね。出会いの記念に受け取ってくれないかな」

「……うん。ありがとう、ユーノ君」
待機状態のレイジングハートを握り締めながら、なのはが微笑む。
だが、すぐに思案顔になるとユーノに言った。
「ゼッドさんとも、事件解決お祝いしたかったな」
「そうだね。でもさ、なのは」
「なあに？」
「ちゃんと生きてれば、またそのうち会える。そんな風には思えないかな」
「……そうだね、違う世界に行っちゃうフェイトちゃんとも、きっとまた会える。それなら、ゼッドさんにもまた会えるよね」
「風と共に現れたあの人だから、またきっと、風が吹けば現れるよ」
「そうなのかな、ゼッドさん気まぐれだし、次は何時会えるかな」
「僕達がおじいちゃんおばあちゃんになる前には、会いたいね」
「うん！」
元気に答えたなのはに安心して、それじゃあ、となのはと別れる。
こうしてジュエルシード事件、後にＰ．Ｔ事件と呼ばれる事件は解決した。
幾らかの問題点は残したものの、その中心に居た高町なのはという少女の胸の中に、爽やかな風を残して。